

文化統計研究会記録(2014-2018 年度)

金城 ふみ子

以下で提示される文化統計研究会記録は、第1分冊第I部「文化統計研究会沿革」で述べたように、2014年度以降に開催された研究会から8回分を選んだ記録である（「文化統計研究会沿革」で◎をつけた記録）。本報告書全体がどのような意図をもって企画・作成されたのか、また、文化統計や文化に関する歴史について、研究会の構成員がどのような考えをもっていたのかなどを理解する一助になると考えている。なお、他の回についてはWeb上で公開される予定である。

1. 2014 年度第2回文化統計研究会記録

開催日時：2014年5月20日（日）13：30-17：00

開催場所：国際文化会館別館セミナー研修室 C

出席者：有田，折橋，金城，田才，原，松田（五十音順敬称略）

配布資料：報告書素の素案改定松田案の提案（松田）素案改訂案

（以下、2014年5月1日版の素案改定案にて朱書きされていた部分は便宜上波線を施した。）

【概要】 初回に提案された報告書松田案の改訂案が出され、松田先生からの補足説明と、それを受けての座談会風のブレインストーミング（松田レクチャーと討論の部）が行われた。

1.1 報告書の構成について

第1回研究会での素案と討論を踏まえて、さらに具体的な報告書の素案2を提案する。2016年に刊行する。報告書の内容は、これまでの発表物に手をいれるのと、新たに調査をするものの二つ。永山先生のコメントをどう入れるか考慮した「素案の改訂版」(5部構成)。

Part 1. : 歴史的側面を含めた背景

折橋，田才両氏に期待。

1. 既存刊行文献の再録(松田の記憶している範囲)または改稿
2. 明治初期からの日本の文化の統計的解析
3. 需要と供給の視点
4. ストックとフローの視点

○供給の側面

壬申戸籍（1872）からの初期の職業構造

大正9年（1920）第1回国勢統計調査の職業・人口構成から昭和15年までの変遷：

最小限の芸術職業従事者の数とは？

○需要の側面

1. 高学歴者の集中的居住
2. 関東大震災：大都市の中の人口の遷移
3. 東京大空襲：
 - 1) 既存の研究会メンバー論考の再編成
 - 2) 聴衆者調査関係の雑誌論文
倉林・松田（一橋論叢），松田・有田（一橋論叢）
松田 NHK交響楽団機関誌『フィルハーモニー』
 - 3) 総論的な展望・文化庁月報（松田，三善科研報告書総論編から）
- 4) 文化統計一般・季刊文化経済学会（松田）
 - 5) オーケストラの財政問題・雑誌『統計』（松田）Boston Symphony の寄付金
 - 6) 「技術変化に伴う社会的価値意識と生活行動・時間の変容の研究」研究課題/領域番号 02244121，研究種目重点領域研究，研究代表者折橋徹彦，研究分担者寺崎康博，片岡栄美，西村みはる，松田苑子，永山貞則
 - 7) 戦前期のインテリの音楽関心（法岡（杉江）淑子）

Part 2. : 個票情報の再編成

これまでの調査データの再編成・既存発表はあまりない。文化統計っぽいもの。

1. 国勢調査データの再編成（永山・周防）。何度か書いている。
2. 事業所・企業統計調査と法人企業統計調査リンケージデータの再編成

【詳細説明】

Part1 既存の芸術家の国勢調査結果の解析論文

- 1) 永山・周防論文（雑誌『統計』），科研費報告書。
- 2) 周防その他・国際研究会での報告（古隅の英語の報告，日本語で書かれているもの無し）

Part2 既存のサービス産業再集計報告書

- 1) 勝浦・永山・松田（『文化経済学』）...配布済み
- 2) 既発表報告書統計の再録
- 3) 古隅・松田（国際統計学会）日本語にはなっていない。

Part 3 : 独自調査の結果の再解析...これまでしてきた仕事のまとめをする。

- 1) 青年芸術鑑賞調査（勤労者青年（最初の1回）と学生調査が含まれる）三善科研のみ。
- 2) 既存の杉江及び有馬の論文が多数ある。
- 3) 芸術家調査（周防の退官記念の論文集）かなり経過がまとまっている。[ハードコピー

の回覧...持っていない人には送る.])

- 4) 聴衆者調査 有田・倉林
- 5) 劇場調査 芸団協の調査 (松田の御蔵の中深く仕舞われている書きかけの草稿.)

・**芸術家調査のまとめについて**

永山先生のコメント：古い，データが古すぎる．バブルが弾けた後，世の中の関心が様々なジャンルに拡散した状況を把握していない．そのところを念入りに掘り起こす必要がある．

- 1) 周防退官記念論集の原稿
- 2) 周防ロンジチュージャナルデータ編成の報告
- 3) 芸団協調査との比較 (要再集計)
- 4) MAD データベースの解析 (三善科研費報告書)

・**青年芸術関心度調査のまとめについて**

- 1) 青年調査(三善科研費報告書のみ)
- 2) 学生調査 (学生調査は有馬の成果があるが，時系列でみるとときには抽出率に違いがあるので留意しなければならない.)
- 3) 各回の報告書のまとめ (杉江名義か?)

そうすると，政府統計の再集計ということにならざるを得ない．

全国消費実態調査，社会生活基本調査が多少使えるのではないか．

(芸術に対する関心が拡散した状況に対しては対応していると考えられる.)

どのように行うか．

サービス業基本調査再集計 (永山・松田・勝浦) とは違った角度で詳細なデータを取ることができる．

Part 4 ...問題は自己調査をする余裕がないことである．

- 1) 政府統計の再集計
- 2) 経済センサスー活動調査...全業種での全数調査

Part 5 : バブルが弾けた後はどうするのか，政府に対して，芸術文化に関するきちっとした統計調査をかけるという提言をしようではないか．

結論的政策提言

永山先生のコメント：皆をどのくらい納得させられるのかが問題だ．カナダやイギリスの統計がいいのか，最近の情勢から見直す必要がある．これは，若い世代が科研費をとって海外調査をする．

以上

1.2 松田レクチャーおよび討論の部

【概要】 1.2.1 報告書の構成, 1.2.2 文化におけるフローとストック (1) フローとしての文化, (2) 文化資本・文化資産, (3) 文化の大衆化現象と評価基準の変化, (4) 国民所得における文化支出, 1.2.3 文化は拡散し得るのか. (1) パトロンの定義, (2) 大学とパトロン, (3) 松田マンガ2系統論, 1.2.4 視点

1.2.1 報告書の構成

第1回の研究会では、報告書素案のストーリーを検討し、①壬申戸籍あたりから「文化」（芸術芸能）の歴史の流れ、②調査対象の時期、③それ以降の3つの視点が示された。討論の中心は、①壬申戸籍あたりからの歴史の流れ、②調査対象時期でどのような調査を行ってきたかの概略についてであった。

第2回研究会では、第1回研究会で提示された報告書素案の改定案が示され、その延長として、上記の③現代や未来についてが討論の中心となり、文化は資本と需要の中でflowがどう作られるか、パトロンの居る社会か、一億総中流社会なのかという問題から、文化やそれを支える「パトロン」の存在の必要性、「パトロン」の定義、江戸時代のパトロンであった町人文化の伝統が現代に引き継がれているのか、江戸時代から平成までの時代の流れなどが検討された。

松田の考えでは、日本では近代は江戸時代に始まっている。江戸時代は文化の拡散期で、明治時代はそれまでの伝統文化を否定し、固形物の文化資本を欧米から輸入した時期で、大正時代はそれらが定着した時期であり、昭和前期は江戸時代への先祖返りが行われ、昭和後期はプロイセン型に回帰している。そして、平成には新国立劇場のような箱モノが作られ、「レパートリー」が可能となった。

文化資産は、人的資産 (human capital) と、有形固定資産 (wealth), 無形資産 (software) に分類できる。有形固定資産は「箱モノ」は時間で劣化する。一方、無形資産は時間で劣化しないもの、つまり従来の考え方で「アート」はこれに該当する。

では文化にとってどのような社会がいいのか。日本は戦後、それを受けて、パトロンとは何かということについて、フリーディスカッションが行われた。

1.2.2 文化におけるフローとストック

(1) フローとしての文化

報告書素案改定案についての説明を受けて、Part 1 について、バブル崩壊後を含めて「現代」についての把握の試みが松田の問題提起とそれを受けてフロアーとの討論が行われた。

社会や文化の問題を考えると、人口の問題が重要である。人口は拡散するのか、集中

するのか。日本では人口が集中し社会で大きな問題になるだろう。

我々の大きなフレームで考えると、文化は、フローがどう作られるかということである。国民所得は、資本 K と労働 L の関数式 $Y=f(K,L)$ で示すことができるが、(図1)

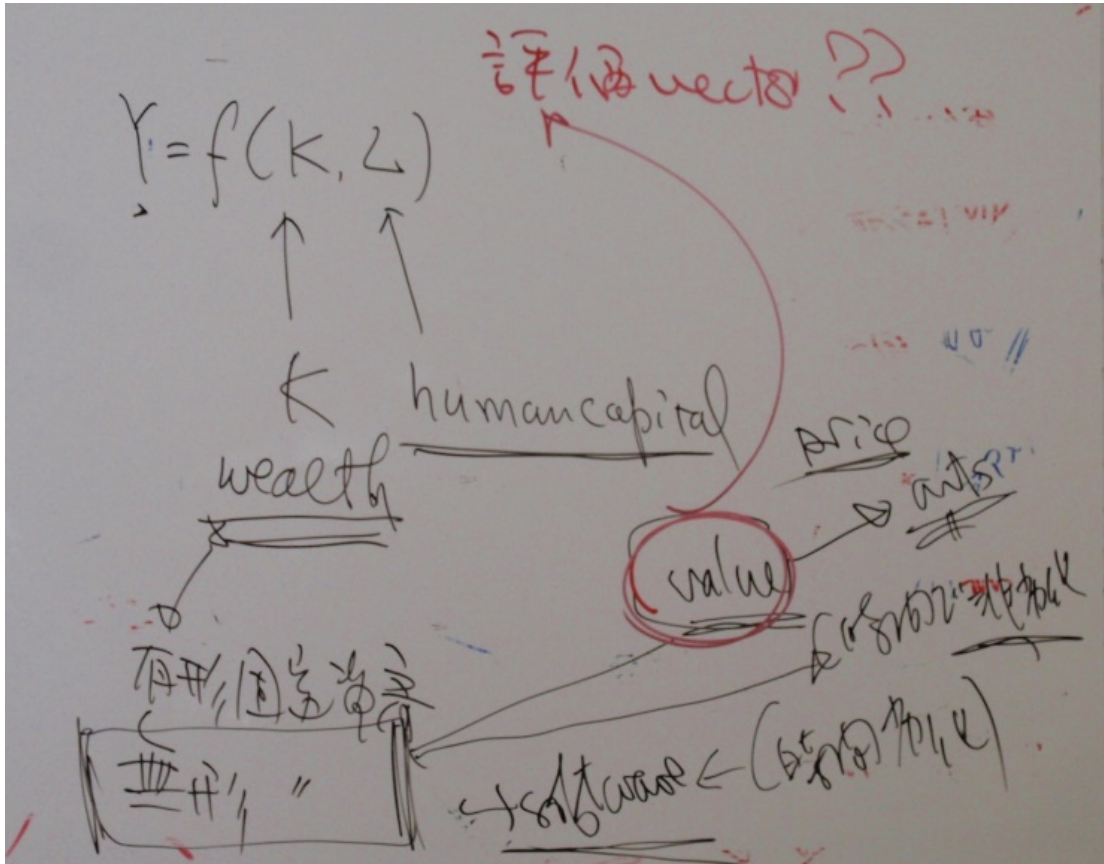


図1 板書

文化の場合、資本が集中してしまうという問題がある。国民所得（文化）はどのような分布をしているのか。ほとんどが中流階級で、日本はこれまで「一億総中流化」と言われてきた。

それに対して、アメリカ型というのは、両極分解している。これは、封建社会や前近代社会と同じ形だ。富裕層がパトロンになって文化を支えてきた。パトロンがいるかどうかは文化の決定的なファクターだというのが伝統的な考え方であった。それに対して、一億総中流化の方がよいというのが戦後、我々日本人が信じてきたことである。

中国、ソ連では、一握りの人に資産が集中していた。(図2) ソ連型では、所得は低かったかもしれないが、実物はどう使えるのかを考えると、一部の人間は優遇されていた。文化は分業でなりたっていた。皆が平均的な人間か、平均的な才能が文化を支えるのだろうか、それとも天才が支えるのだろうかという古くからのパラドックスがここでもう一度出てくる。天才を食させるために残りの人間は四苦八苦するのか、それとも一握りの人間が

パトロンになればいいのか.

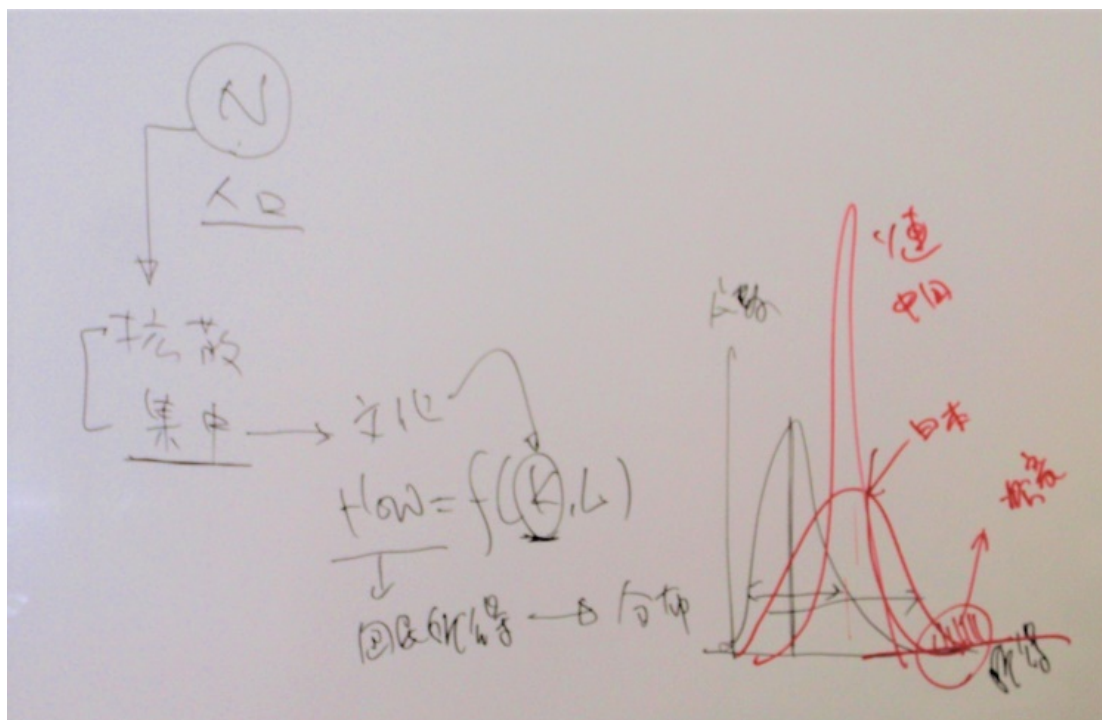


図2 板書

中国、ソ連では、一握りの人に資産が集中していた。ソ連型では、所得は低かったかもしれないが、実物はどう使えるのかを考えると、一部の人間は優遇されていた。文化は分業でなりたっていた。皆が平均的な人間か、平均的な才能が文化を支えるのだろうか、それとも天才が支えるのだろうかという古くからのパラドックスがここでもう一度出てくる。天才を食させるために残りの人間は四苦八苦するのか、それとも一握りの人間がパトロンになればいいのか。

日本のパトロンは、欧米のパトロンとは異なり、支配階級の大名や侍は意外に質素で、町人がお金を持っていた。江戸時代の町人文化にはどういう意味があったのか、明治時代に継承されたのか。明治時代に入ると、西欧文化の取り入れが行われる一方で、伝統文化が否定され、行政区が江戸とは変わる。江戸時代の地図の上に、明治時代の地図を重ねてみると、江戸の町は整然としているが明治はバラバラであることが判る。

日本の近代は江戸時代に始まっている。(図3) 第8代将軍徳川吉宗の時代(享保)は、フランスの絶対王政に匹敵する。吉宗は人口センサスを行っている。明治維新は、江戸時代のものをすべて否定したと我々は中学校以来教え込まれてきた。しかし、丸山真男や吉田健一が秘かに言っていたように、違うのではないか。

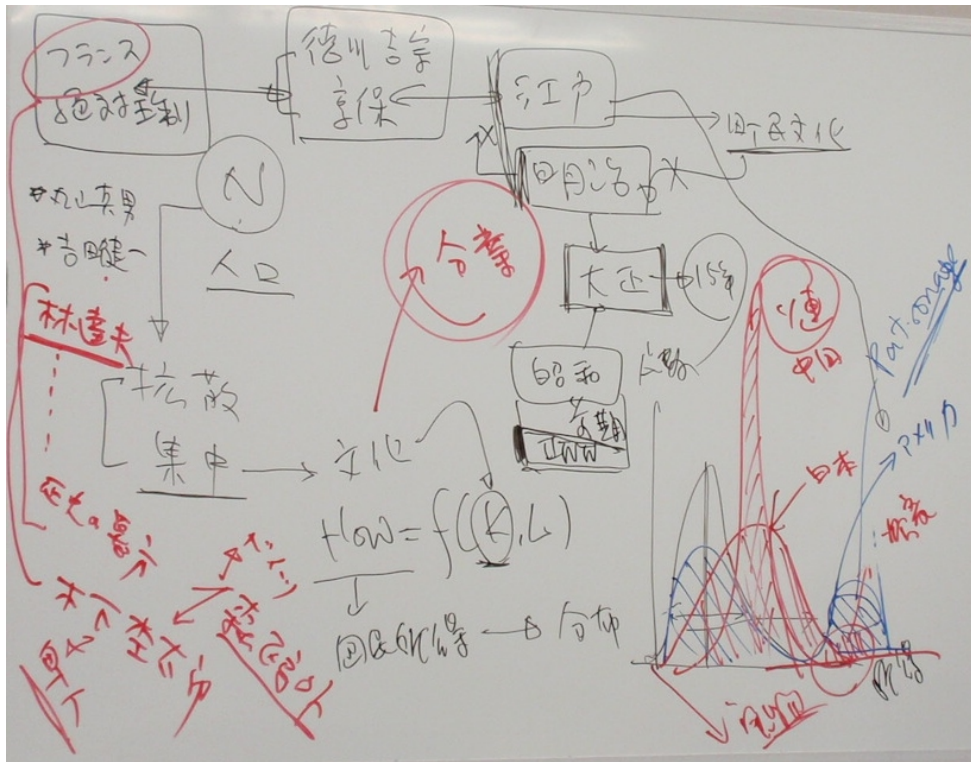


図3 板書

【閑話休題】

松田は林達夫にどっぷり影響を受けた。林達夫（子供時代カナダ在住）は、最初の論文で歌舞伎否定をした。松田はそれを読んで心酔した。林はソ連はいかがわしいとずっと言っていた。有名な随筆集「歴史の暮れ方」では、正統マルクス主義とは縁が切れていたが「ソ連はいかがわしい」という考えのファンだったが、そこから江戸時代を礼賛するという面は読めなかった。最近やっと江戸時代は意味があったらしいと気が付いた。

もう一人のファンの木下李太郎（本名太田正夫、伊豆の西洋雑貨屋の息子）は、親父の厳命で独協中学に通い医者になるべく東大の医学部に行く。森鷗外はドイツ系だと最近判った。お上の考え方だ。木下は根っからの町人で、留学先はフランスだった。鷗外はプロイセン・ドイツだった。

町人文化をどう捉えるのか。江戸の成り上がり者たちが明治維新で江戸幕府を潰すと同時に自分たち自身も成り上がった。プロイセンをモデルにした文化と政治システムを導入した。それが崩れかけたのが大正時代であった。大正はたった15年しかない。昭和の初期の良さを永山先生はわかっていらっしゃるのではないか。昭和前期、第二次世界大戦に入る時代には、ここにもう一度先祖返りしたような時代、プロイセン型社会が現れる。戦後、アメリカ化した。松田はアメリカに留学したのにアメリカが大嫌いで、慶応の人たちにどうしてあなたは反米主義なのかとよく不思議がられる。ボストンに行ったような人は反米になる、田舎に行った奴はあまりそうならないとよく言われる。（折橋）ボストン、ケンブリッジには、猛烈なコンプレックスがヨーロッパに対してある。自分たちがコンプレックスを持っているので、[その反動で]我々には居丈だけになる。（松田）

(2) 文化資本・文化資産

文化の flow の国民所得というのは、いったいどういう分布型であるのかが一つのポイントになる。(松田はここで「フロー」を定義しなかったが、有形固定資産、欧州型の箱モノ文化アンカー文化に対して、無形の伝統継承などをフロー文化との対比として用いていると考えられる。)

分散型が文化を育てるのか、集中型が文化を育てるのか。そのとき、今まであまり注目されてなかった[文化]資本の蓄積はどのような役割があるのか。文化資本とは、いったい何なのか。これはやはり、モノ、固形物である。(話を聞いていると松田さんは文化資本のところに話を持っていきたいのだね。折橋)

文化資本とは何か、どう定義できるか。(倉林先生がここにいたら、3時間くらいの話になる。)通説では、intangible な assets だったと思う。人的資本であり、人の中にある形のないのが文化資本だと言われている。人間国宝みたいなもの。(有田)しかし、松田は、そうではなくて、やはり固形物にあるのではないか。というのは、ヨーロッパの社会の都市と日本の社会の都市との違いは何かというと、ヨーロッパの都市は固形物を抜きにしては考えられない。あの固形物があるから、舞台を考えてみるとよく判るが、レパートリー・システムというものがヨーロッパでは成り立つ。それは、劇場に付随した倉庫があって、倉庫の中に舞台装置があって、あのと時のアイツの演出した舞台装置というものが復元できるだけのものがある。ところが、日本では、御能の舞台があって、能面一つあれば十分である。歌舞伎はよく判らない。「様式」ものというのがある。(田才)演じるのにモノを必要とするのかしないのか。御能の場合はモノは要らない。そうすると、文化資産というのは、人間の中に体化された所作の中に含まれている。そういう文化の蓄積の形態と、違うのではないか。

その違いが出て来たのは、明治維新である。明治時代が江戸文化を否定した。そのときに、能も否定したし、俳句も否定したし、短歌も否定したし、日本画も否定した。要するに、固形物の資産がなくも伝承可能な文化の在り様を否定した。

明治になって近代建築が入ってきて、劇場が出来、やっと固形物によるモノを作り始めた。それが形を成し始めるのが大正時代である。従って、大正時代まではヨーロッパ型である。ここ[昭和初期]で、しゅっと先祖返りする。

戦時中の戦時統制の時代である。しかし、それは第二次世界大戦の中で消えていって、昭和後期になると、また「固形物による文化」が再建される。そのいい例が新国立劇場である。あれで、日本は初めてレパートリー・システムを確立できる見通しがついた。この流れは偏にモデルはヨーロッパであった。

もう一つの流れがある。ここ[戦後?]で切れる。ここで少し復活しかける時に出て来たのが吉田健一、河上徹太郎、小林秀雄のグループであった。「近代の超克」とかなんとか言っていて、日本も江戸時代は近代だったという考えが一つありうる。というふうな形で、僕の好きな詩人で言えば三好達治、佐藤春夫も、そういうふうな形で、日本の伝統の見直しを、

ある意味で図った。萩原朔太郎の俳句に対する伝統美とか。それが、もう一度昭和の後期になって切れる。今、果たして、この極度の集中型で文化がヨーロッパ型で極限まで行くとする、さっき金城さんの言ったような一極社会を引きつける根っこになってしまうのだけれども、それを、こちら側に戻すとする、こちら側の目というのがなきゃいけないということになる。能舞台があって、舞台があってというのは、各藩、皆持っていた。それぞれ都市があって、そのところが文化の土台があった。それに即応するような形で文化の形態がどのような形でありうるのだろうか。というふうなことを考えてみる必要があるのではないだろうか。というのが私の Part 1 で書いてみたかったことだ。(図4)

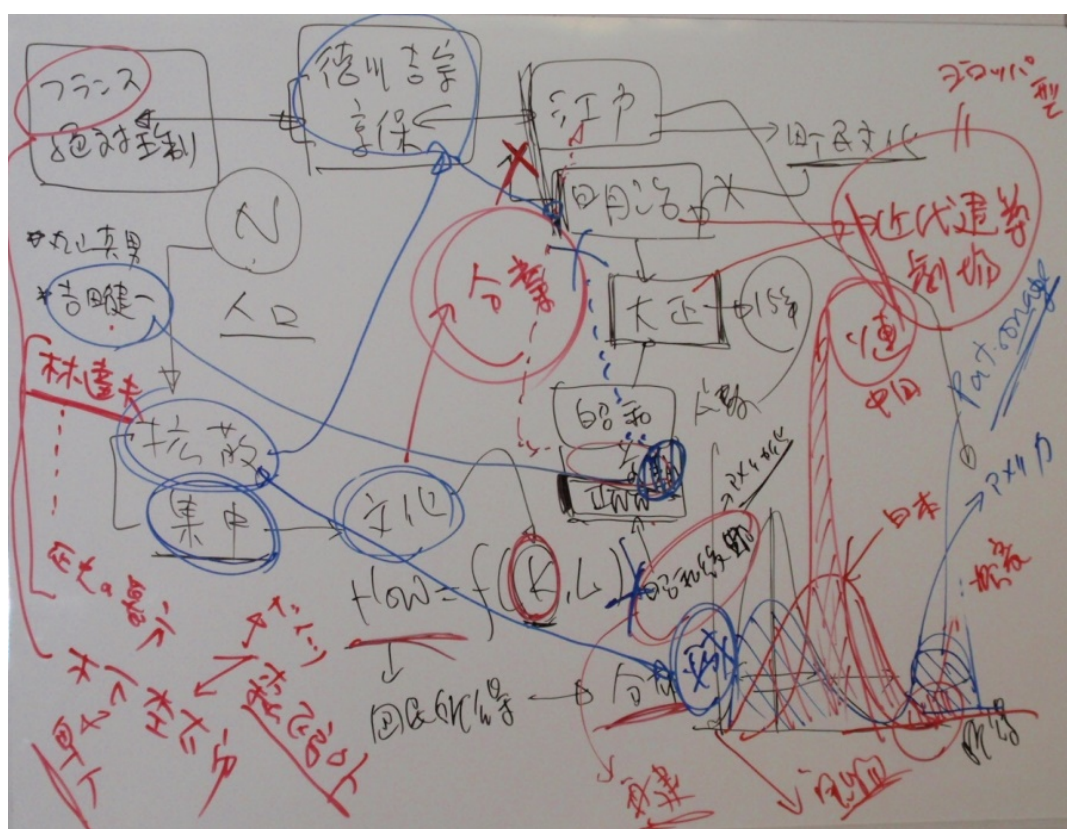


図4 板書

(3) 文化の大衆化現象と評価基準の変化

報告書改定案の提案者松田は、「現代[の文化現象]をどう解釈してよいのか判らない」という。以前、舞踏家の若松美黄が大衆文化を論ずる中でヨサコイを新しい現代文化現象と指摘していたが、松田はAKBなどのファン、つまり集団の熱狂からヒットラーを連想する、Mob に対する嫌悪感全体主義に対する嫌悪感がある、宴席で酒に酔うのも運動会も嫌いだ、さらにサンシモン主義について関心があるが、社会主義になぜ音楽が必要なのか、なぜ人を熱狂させるものが必要なのか判らないという。

文化の評価 **vector** (ベクトル) はどうあるべきか. 下賤なもの (大衆) に「受ける」ことが目指され, 評価基準の変化が起きている. 大衆文化は, 現行の基準を変革する原動力であるが, その中からどう昇華していくのか.

(4) 国民所得における文化支出

その一部として文化支出およびそれを作るための文化支出, 文化的労働力はゼロでもいいのか, よくないのか. 学徒出陣が行われた大東亜戦争期の昭和 16-18 は, その社会実験のような時期であった. この時期は文化的労働力, アカデミック労働力にとって限りなくゼロ (ノンゼロ) であった. (産業職業表 大正 9・昭和 5・昭和 15 参照)

戦時中の国民の文化支出はゼロ (有田)

戦後の, 闇市時代にはもっとひどい (松田) Cf. アフリカ 出征のダンス

1.2.3 文化は拡散し得るのか

江戸時代享保年間には寺子屋の普及時代であり, 識字率 6 割を超え, 当時の欧州と比較すると驚異的な状況であった. 日本の近代は明治に始まるというのが通説であるが, 松田は江戸時代中期に始まっていると見る.

では, 「近代」とは何か. 現代社会は植民地がなくても成り立つのか.

先進国は, 「文化的国家」として, その対極にある国や地域を植民地とし, そこは現代まで収奪地域のままである. 独立して表面上は収奪から解放されているように見えるけれど違う. なぜならば, 多国籍企業 (多数はユダヤ資本): 税金の支払いをしない, つまり租税回避を行っているフリーライダーであるからだ. アジア通貨危機は収奪の結果である.

(1) パトロンの定義

ではパトロンは必要か. 芸術を育てるのにはたしてパトロンが必要なのか. (田才)

TV はパトロンではない. (松田, 折橋) なぜならば, 遊んだ金で文化を支援しているのではなく, 文化を売って収益を得ているから.

メンデルスゾーン: プロテスタントに改宗. 中産階級がどこまでパトロン足りうるか.

しょっちゅう観客としていく人はパトロンか. どこからがパトロンか. (有田) 賛助会員 (個人) はパトロンであろう.

江戸時代旧藩校 (殿様: 誰にも制約されずお金が出せる人 = パトロン) がお金を
出していた. 例: 森鷗外

明治時代 それがなくなり, 政府が奨学金を出した.

北海道: 東北帝国大学農科大学 (札幌農学校... 専門学校)

専門学校 (町民文化のパトロン) 例: 福沢諭吉 慶応義塾大学 Cf. 早稲田専門学校
在孫地主 = 財産地主 (庄屋) の金で大学に行った.

「士農工商」 商: 商科大学・商船大学? ← 政商: 三菱

パトロンとは、「最初にその文化を生み出すためのお金を出し、それを維持するお金を継続的に出している人」と定義できる。パトロンの支援行為の結果、生み出されて文化を享受している人は、お金を出して切符をかってパトロンではなく、観客である。したがって、サントリー財団、トヨタ財団、笹川（競艇）などの財団は、パトロンと言えよう。

寄付行為は、「マネーロンダリング」の一種であるから、一概にパトロンとは言えない。（田才）

(2) 大学とパトロン

大学は、戦前からの帝国大学、戦前の専門大学（戦後大学になった）、戦後にできた大学の3つに大別できる。帝国大学以外の大学に対して「駄弁大学」という蔑称がある。

大衆大学（泡沫大学）は、授業料だけでもっている大学を指す。従って、慶応大学や早稲田大学は含まれない。

現在の大学教育は崩壊している。アカデミーや文化に対する教育機関は崩壊している。（松田）大大学はテレビ会社のように、儲けに走っているから潰れる。（折橋）大学は、大衆化路線を走っており、文化のパトロン足りえない。（折橋）その典型例は、TIU、関東学院（プロテスタント）である。大学紛争終了後、文部省がお金を出してきた。今はそうではないから、いずれ大学はつぶれるのではないか。（折橋）近代のマス教育[一律教育]を行っている大学に変わる教育機関として、寺子屋【1対1の個人教育?】はいつ復活するのか。（松田）需要者、後継者は発生しているのか。

外国の大学はどうか。（田才）ハーバード・ビジネススクールはテレビ出演して資金を稼いでいる。米国の大学は、国の補助金に依存して生き延びていた。1960年代の研究対象は韓国、1980年代はアラブ世界、現在は対象なしなので、大衆化路線を走っている。

今の大衆文化は大衆大学に根ざしている。文化はそれ[大衆・大衆文化]に売り込まなければ成立しないのか。そのためにはどのようなパトロンが必要なのか。

(3) 松田マンガ2系統論

明治以来の文化的流れは、ヨーロッパの流れで、その影響として「ヨーロッパの表現主義」の見られる「桃太郎」、「蜘蛛と TENTOUMUSHI」などがある。「ガロ」もこの系統に属すると考えられる。伝統的文化の一つ、紙芝居は、映画の活弁として引き継がれている。一方、第二次世界戦後は、米国の流れがとって替わる。例えば、ディズニーの影響として、「キャプテン翼」、手塚治虫の一連のアニメなどがある。

欧州モデルがなくなった現在、「今」をどのように考えるのか。

1.2.4 視点

報告書構成として、歴史（松田）・現代調査の対象となった期間（有田）・「今」永山・今後（金城）の各視点が必要である。

2. 2014 年度第3回文化統計研究会記録

開催日時：2014 年 6 月 29 日（日）13:30 - 17:00

開催場所：国際文化会館西館 4 階セミナールーム 402

出席者：折橋，金城，田才，永山，原，松田（五十音順敬称略）

配布資料：報告書の素案 2 「Part1」についての永山コメント

【概要】「報告書素案 2」（松田案）についての永山先生のコメント（June26/2014）が提示され、それをもとに報告書の構成について討論を行った。

2.1 報告書素案に対するコメント

2.1.1 コメント1:順序について

素案における Part 1 の構成

1. これまでの研究会メンバーの既存刊行文献の再録 [本日は松田の記憶している範囲で手持ち資料を持参] 検討の上に改稿
2. 明治初期からの日本の文化のデータの得られる限りでの統計的解析
3. 経済的な需要と供給の視点を明確にするが、その社会的背景を浮きぼりにする。
4. 需要の背後にある人口の増加とその中での芸術的職業分業と社会資本としての劇を明示する。ストックとフローの視点。

【質問】 Part1 は、この順序で編集されるのでしょうか。

【松田】

- (1) 1 の既刊文献の再録と、Part2, 3 の論文や独自調査との関係がよくわかりませんが、冒頭に既刊文献を並べるよりも、2 の明治以降の日本文化の軌跡を、芸術家のデータを中心に、3 の社会的背景とからませでの記述を先にした方がよいのではないのでしょうか。
- (2) この歴史の中で、我々のプロジェクトは何を狙ったのか、その位置づけを明らかにするのがよいと思います。
- (3) 各プロジェクトは調査方法等の説明は結果をみる上に必要な最小限にとどめ、どういう結果が得られたかを中心に記述する。調査方法等は 1 ページ以内のとどめ、詳細は巻末にまとめるとよいと思います。

2.1.2 コメント2:歴史の記述範囲につて

- (1) 松田先生のいわれるように近代化は江戸時代、徳川吉宗の頃に始まったとする説ももつとも思います。ただそうになると、歌舞伎や文楽等の古典芸能について記述しなければ

ばならず、このプロジェクトでは一度も取り上げていないので、どういうデータがあるのか分かりません。従って記述は明治以降でよいと思います。

- (2) 明治も壬申戸籍（1872）からの職業構造のデータがどのようなものか知りませんが、やはりデータ得られる 1920 年国勢調査以降の約 100 年間が中心になると思います。

2.1.3 コメント3: 国勢調査の分析について

- (1) ミクロデータの目的外使用を申請するには、現在借りているデータの成果を出すことが前提と思います。中川さんの話でも、具体的な成果がないと申請は困難だと聞いています。したがって現在のデータから分析結果を出すことが最優先の課題と思います。
- (2) 周防先生の分析がどの程度かわかりませんが、具体的には「2000 年の国勢調査データ（教育項目があるので）をつかって、できる限りの分析を行い、他の年次はまだ完成していないので、引き続き時系列的な変化を分析するとともに、新たな視点（計画する）の分析を行う、」というような趣旨が考えられます。いずれにして具体的な成果が第一だと思います。

2.2 第2回研究会での松田報告の要旨

日本の近代社会の形成をいつと捉えるか？通説は明治維新の欧化と見ている。報告者の見解は、徳川吉宗の享保時期がフランスの絶対王政に対応する。すなわち明治維新以前に近代化が始まったという説をとりたい。

江戸文化は近代文化である。ただし平民・町民が主、明治維新はむしろプロイセンドイツ型であり、大正期はその反動であるが、昭和前期で結実するようになる。しかし大陸進出と軍事化はその動きを遮った。昭和後期は米国占領期の延長でもある。ヨーロッパ化ではなくアメリカ化。平成をどう捉えるか？もうすでに大正よりも長い。

ここで、国民所得を Y とすると、資本 K と労働 L の関数で示されるとする。 Y は国民の中で分配される。その不平等度とジニ係数 G で示すならば、南亮進の長期推計によると、大正末期から昭和前期にかけて極めて不平等になり、 $G=0.6$ 程度であると推定している。この水準は、社会的には不安定に達する水準であるが、他方、所得分布の不平等の累積の結果の富の分布の不平等度が芸術・文化の **Patron** の存在をもたらしたとも言える。また江戸期の寺子屋教育の普及は日本の識字率を極めて高くしていたので、明治維新の義務教育制の普及により平等化社会を準備したともいえる。（図 5）

この富の偏在とパトロンの形成という図式がどこまで江戸期末期にも適用可能であろうか？江戸期を含めて、日本の支配階級である武士・大名等は想像以上に質素であった。これはヨーロッパの王侯貴族のようなパトロンの形成を難しくした。

大正9年(1920)第1回国勢調査の職業・人口構成から昭和15年までの変遷：
最小限の芸術職業従事者の数とは？〔戦時体制〕

○需要の側面

1. 高学歴者の集中的居住
2. 関東大震災：大都市の中の人口の遷移
3. 東京大空襲：

2.4 報告書の再編成案

Part 1.

- 1) [総論を書く]
- 2) 聴衆者調査関係の雑誌論文
倉林・松田(一橋論叢), 松田・有田(一橋論叢)
松田 NHK交響楽団機関誌『フィルハーモニー』
- 3) 総論的な展望・文化庁月報(松田)(三善科研報告書総論編からとる)
- 4) 文化統計一般・季刊文化経済学会(松田)
- 5) オーケストラの財政問題・雑誌『統計』(松田) Boston Symphony の寄付金(雑誌「統計」)
- 6) 「技術変化に伴う社会的価値意識と生活行動・時間の変容の研究」(研究課題/領域番号 02244121, 研究種目重点領域研究, 研究代表者折橋徹彦, 研究分担者寺崎康博, 片岡栄美, 西村みはる, 松田苑子, 永山貞則)
- 7) 戦前期のインテリの音楽関心(法岡(杉江(?))淑子)

Part 2. 個票情報の再編成

1. 国勢調査データ
2. 事業所・企業統計調査と法人企業統計調査リンケージデータ

詳細

1. 既存の芸術家の国勢調査結果の解析論文
 - 1) 永山・周防論文(雑誌『統計』) 科研費報告書
 - 2) 周防その他・国際研究会での報告
2. 既存のサービス産業再集計報告書
 - 1) 勝浦・永山・松田(『文化経済学』)
 - 2) 既発表報告書統計の再録

Part 3. 独自調査の結果の再解析

1. 青年芸術鑑賞調査
2. 芸術家調査
3. 聴衆者調査

4. 劇場調査

詳細

・芸術家調査のまとめ

- 1) 周防退官記念論集の原稿
- 2) 周防ロンジチュージナルデータ編成の報告
- 3) 芸団協調査との比較 (要再集計)
- 4) MAD データベースの解析 (三善科研費報告書)

・青年芸術関心度調査のまとめ

- 1) 青年調査(三善科研費報告書のみ)
- 2) 学生調査 (既存調査の有馬 [文化経済学論集] の再編成)
- 3) 各回ごとの報告書のまとめ (大部分は杉江名義か?)
- 4) 守屋科研の報告書の再編成

Part 4 : 政府の個票情報の再集計

- 1) 政府統計 {世帯統計} (国勢調査) 再集計
- 2) 経済センサス活動調査+事業所・企業統計調査+法人企業統計調査
- 3) 全国消費実態調査・社会生活基本調査・(可能ならば家計調査)

Part 5

- 1) 結論的政策提言 (社会の変容と経済書統計の対応)
- 2) 新規な統計調査体系の提案

以上

3. 2014 年度第5回文化統計研究会記録

開催日時：2014年8月17日（日）13：30-16:00

開催場所：国際文化会館西館セミナールーム 402

出席者：有田，折橋，金城，永山，原，古屋，松田（五十音順敬称略）

配布資料¹：

1. 大瀧詠一「日本ポップス伝」（A3サイズ1枚）
2. 装苑「ファッション好きのための音楽クロニクル」『装苑』（2014年2月号，pp.42-43）
3. 松田レジュメ「日本における洋楽の受容からオーケストラ音楽の形成」（A4両面1枚）
4. 岩野裕一「入門講座 日本指揮者列伝」『日本経済新聞』2014年7月3・10・17・24・31日夕刊

【概要】①講義「日本における洋楽の受容からオーケストラ音楽の形成」（松田）

②大瀧詠一「日本ポップス伝」などポピュラーについて（古屋）

3.1 2005 年国勢調査の集計結果(周防)

ご本人欠席のため次回研究会に繰越。（部分的に集計結果の送付を松田が受け取っている。ただ本人から取扱注意の連絡があり，単身者のところだけは活用可能な集計であるが，残りは当初に依頼の集計様式と違うので再度解説した。改定版の集計結果が来てから次回に全部を合わせて配布する。今回は配布を留保。）

3.2 日本における洋楽の受容からオーケストラ音楽の形成(松田)

前回の研究会で永山先生から，(1)ジャンルをどこまで広げるのか，早く決めたほうがよい，(2)確固たるデータが得られるものに限定したらどうか，という課題を提案されています。ここで(2)は永山先生からの前回国勢調査結果の紹介にあるような，部分的な実態調査などではなく，政府統計の意です。国勢調査では，最初に確定集計がされた後も，事後的に再集計されている。時系列的に比較可能にした産業・職業の再分類結果が，この分析対象としてのこのジャンルの確定に関して参考になります。すなわちどこまで詳細分類が可能かです。いわゆる歌舞音曲にたずさわる芸術家は，手法・内容から伝統芸能と洋楽に分けられますが，永山先生のご報告の際に資料として示された第一回の大正9年(1920年)

¹ 研究会後に添付ファイルで配布予定の関係資料については，2014年度第5回文化統計研究会記録の文末を参照のこと。

国勢調査の結果では、このような和洋の内容・技法での分類は、国勢調査に使用された産業職業では出てきません。(図6)

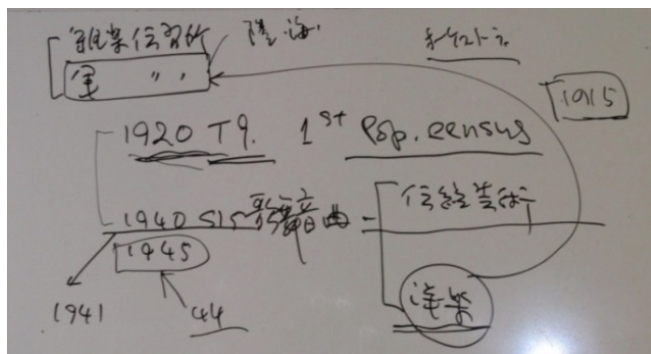


図6 板書

永山先生からの宿題に関連して、「どこまで洋楽の従事者を「データで測れるのか」について考えたいと思います。

配布資料3のResumeの第1項目での定式化を参照：

1. オーケストラ音楽の成立要件

楽団員の形成

独奏楽器の演奏者の数の増加

当初： ピアノとヴァイオリン

管の奏者の形成

打楽器奏者の形成

指揮者の必要性

プログラムの編成

指揮者の能力の制約

楽団員の能力の制約

表裏の関係：オーケストラの規模の制約

楽譜の入手可能性

聴衆の形成

聴衆の理解力の制約

表裏の関係：予算規模の制約

新曲の導入と著作権

定期公演制の確立

聴衆の層の厚み

採算の確保

一人の奏者また演者の行ういわゆる独奏者の公演と異なり、集団であるオーケストラ音楽が成立するための条件は、ある楽器の同じような力量の演奏者の数の増加とそれに伴って、各種の楽器の奏者が出揃ってくるというのがポイントになります。

学校教育での洋楽の演奏者は、弦とピアノから始まったようです。さらに正確には、管と打楽器奏者は、和風の楽器から洋風の楽器への形状の変化と一緒に増加していきます。周知のように幕藩体制に戻るならば、軍の通信者としてのほら貝や太鼓吹きの古来からの歴史で分かるように、明治期に入る以前の軍の場合にも同じような楽器はありました。幕末期に導入された洋式の海軍や陸軍でのラッパと太鼓の存在を思い出すと分かるでしょう。

明治期では、軍楽隊のラッパが不可欠ことを想起してみてください。明治「♪宮さん、宮さん」【トンヤレ節、江戸に向かった倒幕軍が歌った西欧の影響を受けた、最初の軍歌】で行進したときには、音楽付きでした。幕末の陸軍の伝習と一緒に【欧州から】ラッパが入ってきている。ラッパが重要でしたが、ただ奏者がどれくらいいたかは不明です。

【松田後記：聯隊（連隊）ごとにいたのか、大隊単位でいたのかといった単純なことでもわれわれの世代になると常識ではなくなり、不明です。】

【金城後注1：幕末期には、幕府軍にも官軍にも音楽隊があったようです。京都時代祭り行列では、明治維新に京北町から官軍に参加した山国隊「維新勤皇隊」は、笛や太鼓の行進用音楽隊がピーヒャララと演奏しながら後進していきます。

<http://www.youtube.com/watch?v=TBsomjUn6dU>, 佐倉時代祭でも、土井利勝が入封を命じられた1610年から400年の2010年には、記念の時代まつりが行われ、幕末式様式調練研究会による官軍鉄砲隊の行進、そして官軍鉄砲隊と新撰組の演武との事。官軍鉄砲隊には軍楽隊(鼓笛隊)が供奉しています。 http://www.youtube.com/watch?v=E_OLQw1nyg】

明治維新时期には、音楽関係の公的養成所としては、雅楽伝習所はその後も続き、海軍伝習所（海軍軍楽隊の元祖があったと言われている）がありました。後者では洋楽が行われていたが、規模は不明です。海軍軍楽隊は、推測だが、おそらく一等巡洋艦以上には艦長以下士官たちが士官室での食事の際に音楽隊の伴奏いわゆる「飯伴」【飯番だと思って聞いてました！（金城）】がいたようです。ただそれが一等巡洋艦以上なのか、艦隊の司令長官のいる旗艦だけなのか、いろいろ調べたが判りません。

【松田後注1：飯伴は「ホテルや宮中などの高級晩餐会の一つまり飯【メシ】の伴奏【バン】をする音学家たちのことをメシバン屋と呼ぶ」と堀田善衛の自伝的小説「若き日の詩人たちの肖像」（1968年刊）54ページ下段で記しています。昭和10年代の俗語。研究会の折にははなはだ不正確なことを皆さんに伝えました。飯伴奏があったのは聯合艦隊の旗艦だけで、しかも母港に停泊中のようでした。昔読んだ伝記的な小説の一節を抄録します。

「聯合艦隊にはしかし、ヨーロッパの動乱で何か動揺の徴が見えるというようなことは、少しも無かった．．．[中略]．．．聯合艦隊司令部の食事は、朝は各自かってに、．．．昼が洋式のフルコースで、スープから始まってデザートに終る、銀の食器、フィンガー・ボールの正式のディナーである。この時、十二時五分から三十分管、司令長官の食事中軍楽隊が後甲板で音楽を演奏する。軍楽隊の日課訓練を兼ねてではあるが、「軍艦マーチ」などという武張ったものはあまりやらない。「春雨」とか「越後獅子」「元禄花見おどり」、外国のポピュラー・ミュージックのようなものを演じて聞かせる。山本〔五十六〕は、「支那の夜」がたいへんすきだったということである。司令部以外の乗組員は、早目に昼食をすませて、後甲板へこれを聞きに行くのがたのしみでもあり、また聯合艦隊旗艦乗組の一つの余録でもあった。もっともこれは、艦が停泊中だけの話である。夜はまた和食．．．[中略]．．．ただし、海軍では士官は食費を自分で払うことになっていたから、テーブルの末席につらなる若手の司令部暗号長などは、相当にふところにこたえたそうである。昼と夜の食事の時には、長官を中心にして原則として全員〔参謀以下各幕僚、副官、暗号長、気象長、艦隊機関長、艦隊主計長、艦隊軍医長、法務長、それから「長門」の館長が時々同席する〕が揃う。「長門」のような戦艦の司令長官皇室は、チーク材を使った、少し古風な客船の一等サロンの如きしつらえで、世界のどこの港のどんな賓客を迎えても一応羞ずかしくないだけのことはしてあった。」(阿川弘之「山本五十六」1965年刊。)

なお、第2次世界大戦中の聯合艦隊の旗艦であった大和の現存資料の復刻版には、司令官室の詳細記入はありません。参照：原勝洋（編著）「戦艦大和建造秘録」1999年刊、KKベストセラーズ。）

永山：おそらく戦艦かそれとも旗艦だけでしょうね。

有田：優雅ですね、これから戦争をしようつつうのに。呑気なもんですかねて感じがしますけどね。

【金城後注2：海軍軍楽隊の第1期生吉本光蔵は、1878年（明治11）6月、15歳で「第1回軍楽通学生10名の一人として採用され、12月に正式入隊しています。「軍楽通学生」は、「海軍軍楽隊が1871年（明治4）に発足して7年後に始めた後継者養成で、初めて一般から志願者を募り、6か月の教育期間後に適性を判断し、正式に楽生として採用するという合理的な」1899年（明治35）から1902年（明治35）にかけて、海軍軍楽隊からベルリンに留学しています。（「海軍軍楽長・吉本光蔵のベルリン留学日記」

http://www.lib.geidai.ac.jp/MBULL/37Tsukahara_Hirataka.pdf）第2期生の瀬戸口藤吉は、「海軍軍楽隊員の二回目の募集に合格した瀬戸口は、明治15年12月23日に他の15名とともに入隊」しています。（NPOチャンネル日本「吹奏楽への足跡—海軍軍楽隊から海上自衛隊の音楽隊へ（1）」<http://www.jpsn.org/report/band/235/>）

陸軍にも軍楽隊があり、陸軍の軍校である陸軍戸山学校（現新宿戸山公園近辺）で、歩兵戦技、歩兵部隊の戦術、体育、軍楽の教官育成と研究が行われていた。1912年（大正元年）に陸軍歩兵学校が設けられ、戸山学校では「軍楽生徒隊」を統括し、「乙種学生は各隊のラッパ長が対象で、ラッパ譜の訓練を実施し、軍楽生徒は、軍楽部を志す者から選抜し教育した。」卒業生には、団伊玖磨、芥川也寸志がいる。（Wikipedia「陸軍戸山学校」）

松田：陸軍の第1種兵器は銃と剣、第2種が喇叭、第3種が軍楽器とされていました。（芥川の自伝抄「歌の旅」また「軍楽隊」「楽手」などという言葉が使われている小説が青空文庫掲載作品に6例見つかっています。そのために、陸海軍が音楽隊を養成していたことは解るにしても、その規模がどのくらいであるのかが判りません。なぜ、そのことを気にするかというと、国勢調査（1920から1940）では、現役の軍人（軍楽隊所属の歌舞音曲の演奏者を含む）の数は表章からは除外されているからです。

1920年当時には、独奏者と、山田耕筰のオーケストラと、「三越の楽隊」などがあった程度の当時の洋楽関係者は、軍関係を除くと100人位であったと考えられます。だから当時の音楽は、ほとんど伝統音楽であったと推測できます。

【松田後注2：堀内敬三の1935年刊の随筆集「ヂンタ以来[コノカタ]」収録の「ヂンタ興亡史」（初出1932年3月「東京日々」）の記述と「吹奏楽論」（初出「フィルハーモニー」1933年）にある日本陸海軍、スーザバンド、イギリス歩兵、プロシア歩兵の吹奏楽団員数のパート別の人数を入れた一覧表が載っていました。引用を忘れていました。（「ヂンタ以来[コノカタ]」アオイ書房刊、（音楽之友社復刻版、1977年刊）。

「日本の軍楽隊は皆専門教育を受けた楽手ばかりであるが楽手の待遇が下士である為に楽長級に出世するか或いは転業するかしないと相当の家族が養へないので、結局楽手の主力は他兵科の下士と同年輩の若い人だけになってゐる。若し准士官の定員を増加して楽手を他兵科の下士と同じ早さで進級せしめ、楽手のまま准士官として勤続できるやうにして置けば演奏効果は挙がるであらうが是れは少々無理な望みかも知れない」同上書、90-91ページ追記。

この表によると、編成は外山学校の一隊（フランス式）が計52人、海軍軍楽隊の通常の一組（ドイツ式）が44人とあるので、一隊とは限らないので、これらが複数組あって、陸軍は後述のように、末期に芥川が400人ほど残っていたと書いているので、最盛期はかなりの人数になっていて、それに堀内が書いているように下士で退役していたとすると潜在的にはかなりの人数が軍関係者で占められていた可能性はからです。軍楽隊は、結局弦は養成しなかったのであろうと思われまふ。これらの点は詳細な記録がどこかにあるでしょうが、他日を期したいと思ひます

野村光一が1949年に湖山社から出した自伝『音楽青春物語』は、おもしろい本で、当時の聴衆がどのくらいか書かれています。上野の東京音楽学校（音楽取調掛の後身、東京芸術大学の前身）の奏楽堂で行われた春秋の演奏会に参集する人の数を300-400人と書いています。【金城修正：高々600人，p.37】奏楽堂【明治23年創建の日本最古の木造の洋楽ホール，昭和61年に重要文化財指定】の舞台は最初はピアノとヴァイオリンの演奏用で小さかったが、だんだん大きくなっていきました。管や他の弦が入って、だんだん舞台がせり出して、最後に残ったスペースに椅子が300-400【600ほど，同上】あり、お互いに顔を知っているというのが、当時の洋楽の聴衆でした。1915年に山田耕筰がオーケストラを作り、日比谷公会堂で定期演奏会を開く頃になると、だんだん顔を知らない人が増えたと書かれています。【同上】ただし、表は入っていないし、文章には年次もないので、他のものと突き合わせなければ確定できません。【重要文化財】旧東京音楽学校奏楽堂 <http://www.taitocity.net/taito/sougakudou/>

この当時の subscription concert というのは、ひと種類であったから、それが、音楽の聴衆者と、それに見合う奏者の数であったと解釈しています。

そこから、ジャンルの話に戻りますが、和洋楽器の奏者のジャンル別の数値は得られません。洋楽器はピアノとヴァイオリンの独奏者が多かったのです。当初のピアノは、ドイツからの御雇外国人教師によって音楽学校でピアノとヴァイオリンが独奏楽器として最初に音楽学校で教えられていました。それから管の奏者が来て、打楽器奏者が加わり、打楽器奏者は、軍楽隊の方が早かったわけです。ラッパと一緒に不可欠であったからです。

芥川也寸志のエッセイ集『音楽の旅』の冒頭に、1944年某日に陸軍外山学校軍楽隊の入学試験が行なわれました。日本に若い音楽家を残そうと上野音楽学校に陸軍が軍楽隊員を募集に来て、芥川也寸志など20人が志願したと書かれています。入隊したのは14人で、入隊したときには、まだ400人くらい軍楽隊は残って演奏していました。海軍の方の募集状況は皆目判りません。【松田加筆：上野の音楽学校と並ぶ音楽教育は、師範学校・高等師範学校の系列でなされていた。後者は当然、数多くの教科のなかの音楽教育に過ぎなかった。】

【松田後注3：これは山口常光陸軍軍学隊長から乗杉嘉寿東京音楽学校長に持ち込まれて実現したそうである。芥川也寸志「音楽の旅」旺文社文庫版，24 - 38 ページ参照。特に23ページ。

打楽器奏者の養成はもっと困難であったようだ。岩城宏之の自伝『森のうた』に、1951年に芸術大学音楽学部器楽科打楽器専攻で、最後に滑り込んだのが太鼓の2人（当時病弱だった岩城と、後にジャズマンになった白木）で、一番威張っていたのが指揮科の学生だったと書かれている。指揮科にはどのくらい学生がいたのか定かではないが、岩城と同期だったのが山本直純で、渡辺暁雄に可愛がられた。その前は、オーケストラの指揮者というのは、海外帰りの指揮者だった。それではどうしようもないと考えたのが「斉

藤メソッド」を始めた斉藤秀雄（父親は英語学者の斉藤秀三郎）である。】

以上がおおよそ日本でどのようにオーケストラが編成されてきたかの歴史です。その後は第2次世界大戦後の話になります。

【**金城後注3**：今回の松田先生のレクチャーの中には「新交響楽団」の話が出てきませんでしたが、参考に1927年2月20日に行われた新交響楽団（NHK交響楽団の前身）の第1回定期公演の写真をお目にかけます。（**図7**）この写真では、向かって右上にコントラバス4台が見えるので2管編成？とも考えられますが、弦楽器より管楽器の方が多いようにも見えます。

【**参考**】オーケストラの編成には幾つかありますが、2管編成なら総勢50名程度になります。内訳【**弦楽器群**】第1ヴァイオリン10，第2ヴァイオリン8，ヴィオラ6，チェロ4，【**木管楽器群**】ピッコロ*，フルート2，オーボエ2，イングリッシュホルン*，クラリネット2，バス・クラリネット*，ファゴット2，コントラ・ファゴット*，【**金管楽器群**】ホルン2から4，トランペット2，トロンボーン3，チューバ1，【**打楽器**】ティンパニ1，【**その他**】打楽器類数名



（出所）N響「演奏会記録」，<http://www.nhkso.or.jp/library/archive/>

図7 新交響楽団 第1回 定期公演（1927年2月20日 日本青年館）指揮：近衛秀麿

3.3 大瀧詠一「日本ポップス伝」などポピュラーについて（古屋）

古屋：トンヤレ節[あるいはトコトンヤレ節]（最初の流行り歌[軍歌]），唱歌関係，鹿鳴館の

ダンス・ミュージック，オペラ，オペラとジャズの融合→浅草オペラ（エノケン），ジャズの流れ（上海で勉強して？），戦後の音楽は，演歌と歌謡曲がありますが，両者を混ぜたような古賀正男の音楽には，戦前のジャズの影響が見られます．つまり，日本に入ってきた西洋音楽の日本風アレンジしたものです．一般的には「日本的なもの」と思われているものにも，西欧からの影響があり，今日の **J-pops** に繋がっています．

有田：戦後の子どもの歌の流れが抜けています．「ワン・ツー・ドン」の早川史郎の作品など．早川史郎企画コンサート<歌と映像でつづる日本の子どもの歌 140年の歩みコンサート>が8月30日（土）の午前にあります．

【金城後注4：「ワンツー・どん！」とは，小学校1年生を対象とした番組（NHK教育テレビで1974年4月10日から1996年3月4日まで放送）「NHKワンツー・どんベスト30」というCDがレンタルビデオ店TSUTAYAに今も置かれています．】

有田：シャンソンの流れもほとんど出てこない．南こうせつなどのフォークも抜けています．

古屋：この年表は，大瀧詠一の放送を聞いたリスナーが作ったものです．

永山：国勢調査とポピュラーを combine して，一つの柱にできないか．この資料の放送を聞きましたが，明治，大正まではうまく編集されていると思いました．（下記参照）

【古屋さんからの特にポップスの変遷に関する情報資料送付時のメールの転記】

- 「大瀧詠一 日本ポップス伝」の年表（添付ファイル）

（説明が難しいのですが）1995年8月7日～11日にNHK-FMで放送された「大瀧詠一 日本ポップス伝」の内容を有志の方が年表化したものです．

https://www.youtube.com/watch?v=hn4UKr6DhoY&list=PLDui5ErrMV_8clO9hH6ekvtNaspQSANq2 詳しくは，こちら→<http://goo.gl/1Hdv7x> のブログ記事をご参照ください．

（ちなみに1999年1月4日～8日には，続編である「大瀧詠一 日本ポップス伝2」が放送されました． <http://www.nicovideo.jp/watch/sm9473961>）

【参考】大瀧詠一 <http://goo.gl/lZ1O7b>

- 日本の音楽ジャンル変遷図（添付ファイル）『装苑』2014年2月号「ファッション好きのための音楽クロニクル」に掲載されていた変遷図です．

- その他参考になりそうな Web サイト ・ポップの世紀 Pop Culture of 20th Century <http://www3.ocn.ne.jp/~zip2000/index.html>

- 菊池清麿-SP 歌謡の世界・なつかしの歌声 <http://www5e.biglobe.ne.jp/~spkmas/>

松田：林光（はやし ひかる）に『日本オペラの夢』（岩波新書）というコンニャク座の物語りがあります．木下順二の「夕鶴」に團伊玖磨が作曲していますし，三善晃「遠い帆」は，高橋睦郎の戯曲に作曲したものでありますが，日本人による日本語で書かれたオペ

ラはあるが数は少ないです。

三善は、パリ在住中に一度オペラを書こうとしたが出来ませんでした。【参考文献に書き漏らしたが、高橋睦郎著・三善晃著・ピアノリダクション新垣隆「オペラ支倉常長：遠い帆 ピアノリダクション（四手連弾）全音楽譜出版社、2012年刊の序文。】

金城：なぜ日本のオペラは作れないのでしょうか。

松田：ドラマチックにならないからというのが一応の回答でしょうか。

永山：オペラの表現は日本語に合わない？

有田：しかし、Jアニメはストーリー性があり、日本人の独壇場だ。1音に1音を乗せるのは間延びがするからだろうか。

松田：ベルリオーズの全部語りになる曲があるが、自然な言語表現として聞こえます。

【**金城後注5：**日本人による日本語で書かれた作品は多くないと言われています。正確にはスコアとともに手に入る作品は確かに少ないです。作品情報は、あちこちに少しずつ掲載されていますが、作品数を確認するのに閲覧できる一覧が見当たりません。（昭和音楽研究所が出している『オペラ年鑑』にはその年の公演一覧が掲載されているようです。現在 Wikipedia の「オペラ作品一覧」に掲載されている 303 作品のうち日本人が日本語で書いた作品は 10 作品で 3.3%にすぎません。黒沼ゆり子の関わった「日本メキシコ友好 400 年記念」に日本語で書かれた作品『夕鶴』をメキシコ人が南房総で日本語で上演した例もあります。（www.nanso-bunka.jp/admin/upload/200805/pdf_20080529140949.pdf）また、日本の話をテーマにしたオペラ作品も少ないですが、「Dun No Ura」http://www.dannoura.net/Dan_no_Ura/ri_ben_yu.html）、「蝶々夫人」http://www.dannoura.net/Dan_no_Ura/ri_ben_yu.html（日本の話をタイで英語の歌詞で上演）などがあります。】

【**金城後注6：**語り手、声楽と管弦楽のための作品「レリオ、あるいは生への復帰」(*Lélio, ou Le retour à la vie*) 作品 14bisu のことでしょう。「フランスオペラの楽しみ—YouTube で楽しむフランスオペラ」では、<http://qqcumb.web.fc2.com/lelio.html> 「全6曲構成の、5曲までは「語り手」（語るだけ。歌うのではない！）の俳優が舞台に立ち、オケ、独唱、合唱はカーテンの裏から演奏する、ってんだから！最後の最後になってやっと幕が開くんだと！」と紹介されています。ちなみに「日本ではコバケン（小林研一郎）がちゃんと語り付きで上演してるというから、さすが！」とも書かれています。】

松田：シェイクスピアの作品は当時の作品と同様、韻文で書かれていますが、その韻文のままにそっくりオペラ化されているのは少ないです。

【**金城後注7：**シェイクスピアの作品に基づいたオペラ作品が多数ありますが、韻文のままかどうかは未確認です。（参考資料「シェイクスピア作品原作のオペラ作品一覧」）】

金城：イタリーだけ，なぜオペラが栄えたのでしょうか。

松田：日本語では脚韻を踏むのが難しいからでしょう。

有田：若い人の歌では，ラップなど韻を踏んでいるものが多数ありますよ。

【有田後注：韻で思いついたのは「ミスチル」の歌詞ですが，自分で書かなくてもサイトがあるので，そちらにお任せしたいと思います。ミスチルで引いたら出てきたのが「亀田音楽専門学校」のケーススタディをしてみよう～#06 「韻をふんだっていいんじゃない」<http://magamo.opal.ne.jp/blog/?p=1426>，もっと一般的に「押韻」ならば，次のサイトが参考になる。<http://atonal.fc2web.com/mr/kotoba/kotobaasobi/acros/acros12.html>

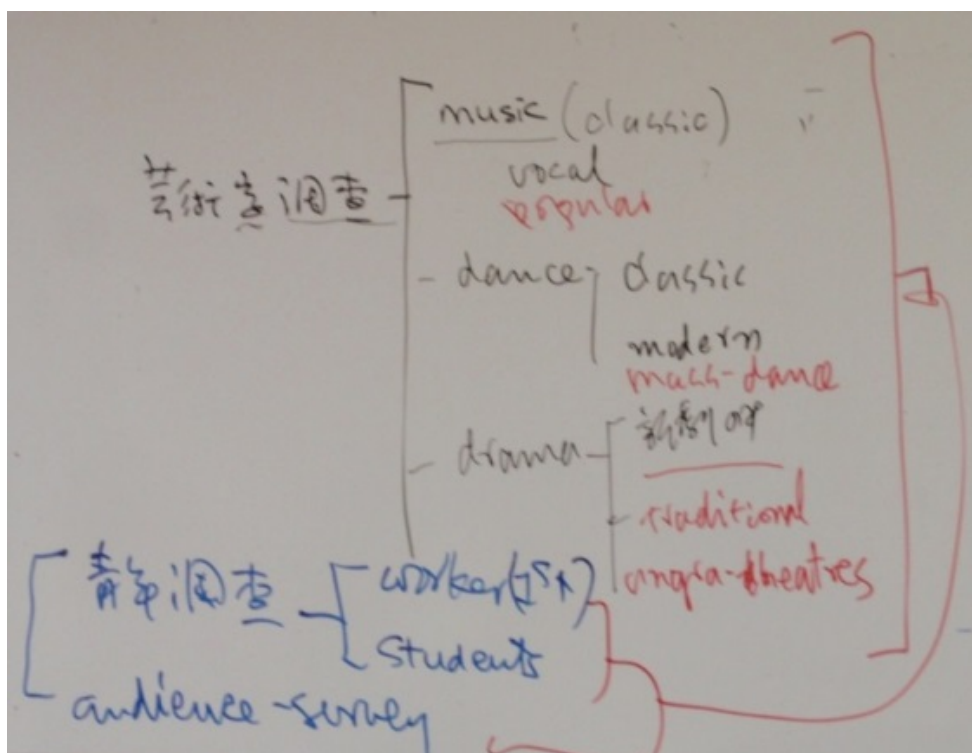


図8 板書

松田：永山先生の「(1)ジャンルをどこまで拵げるのか，早く決めたほうがよい」というご指摘への答えとしては，ジャンルは和洋の区別ができませんし，クラシックとポピュラーの区分もできないので，歌舞音曲従事者で括るより仕方がないと思います。結論としては，我々の実態調査で言及しうるものと公的統計で言及しうるものとは，分け方として，

◆音楽のジャンルは最大限とる。

◆演劇は，近接ジャンルをどうデータと一緒にとりまとめて書けるか。どうストーリー性をもたせて書けるか。だれが書くか。

◆ダンスは伝統，クラシック，パフォーマンスに分ける。などでしょう。他にも以下の課題があります。(図8)

◆供給側の芸術家調査と、需要側の青年調査（勤労者青年と学生の双方に分かれる）と
ごく一部の演奏会単位で調べた聴衆調査をどうまとめるか。

【後日添付ファイルで配布予定関係資料】

(1) 日露交歓交響管弦楽演奏会（戦前・戦中音楽界資料室）

http://www.tt-museum.jp/m_2600.html

【参考文献】

- ①音楽芸術別冊 『日本の作曲 20 世紀』（音楽之友社, 1999 年）
- ②岩野裕一 『王道楽土の交響楽 満洲—知られざる音楽史』（音楽之友社, 1999.）
- ③『フィルハーモニー 99/2000 SPECIAL ISSUE』（NHK 交響楽団, 2000 年）
・どなたか N 響会員で持っていそうな方を御存知ありませんか？
- (2) 日本のオーケストラ事始め（月刊クラシック音楽探偵事務所, 横松隆...音楽家）
<http://yoshim.cocolog-nifty.com/office/2009/06/post-0b51.html>
- (3) 論文(pdf)
 - ①平田公子（2012）「楽取調掛の日本音楽観」『人間発達文化学類論集 16 号』福島大学, pp.35-44.
<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000004163/16-98.pdf>
 - ②海軍軍楽長吉本光蔵のベルリン留学日記 37Tsukahara_Hirataka
 - ③東京交響楽団 1 case_tokyosymphonyorchestra（政策研究大学院大学）
 - ④邦楽と洋楽の歌唱表現法（音響的特徴の比較）kenkyu02_08
 - ⑤日本語のうた「声の特徴」—共通詞の歌い分分け（大阪芸術大学研究所）
kenkyu04_08
 - ⑥イタリアにおけるクラシックコンサートに参集した聴衆の満足度水準に関する研究（好満あき子 広島文化学園大学学芸部紀要 2 号 2012）g02-06
 - ⑦日本におけるクラシックコンサートに参集した聴衆の満足度水準に関する研究（好満あき子 広島文化学園大学学芸学部紀要 3 号 2013）g03-03（有田先生のレジュメにあった論文）
- (4) その他参考資料
 - ⑧夕鶴 メキシコ人による日本語での熱唱(日本メキシコ友好 400 年記念)
 - ⑨オーケストラの楽器編成

4. 2014 年度第6回文化統計研究会記録

開催日時：2014年9月21日（日）13：30-16:00

12:00~1:30 「SAKURA」にて永山先生の卒寿のお祝いの会

1:30~5:00 研究会

開催場所：国際文化会館西館セミナールーム 402

出席者：有田，折橋，勝浦，金城，杉江，田才，永山，原，古屋，松田

（五十音順敬称略）

配布資料：

1. 「永山先生の文化統計に対する貢献と国際調査の職業分類の改訂について」（松田芳郎）
2. 「学生調査の母集団復元方法について」（永山貞則）
3. 「永山貞則回想記」（統計基準部機関紙連載記事抄）『統計通信』（添付ファイルで別送）
「統計通信」に連載の「統計の散歩道」（no. 665-673）の pdf 版

【概要】講義（文化統計+社会生活基本調査）

1. 永山先生の文化統計に対する貢献と国勢調査の職業分類の改訂について：統計学史の学説史的検討の視点（松田芳郎）
2. 学生調査の母集団復元手法の提案（永山貞則）

4.1 永山先生の文化統計に対する貢献と国勢調査の職業分類の改訂について（松田芳郎）

4.1.1 報告

レジュメに沿って永山先生の文化統計に対する永年の改革の意義についての報告が行われた。

松田：どこかで標題の Word の変換ミスがありまして、永山先生の文化統計に対する「こうけん」は、contribution の筈でしたが、「後ろから覗んでいる」という意味では、こちらの字【後見】でもいいかなと思いました。（笑）外の人に配る配布資料としては、後で直させていただきます。

今日は substantial な報告はいたしません。「統計学史の学説史的検討の視点」などという大仰なタイトルを入れましたけれど、永山先生につきましては、「永山先生インタビュー記録」というのが『戦後日本の統計行政』というタイトルで、法政大学の日本統計研究所で出ております。で、その他に、『統計通信』という全国統計協会連合会の出していた新聞がございました。それで、「統計の散歩道」という表題で 665 号から 673 号に亘って詳しく書か

れてあります。で、それを今度、**editing**して先生の所だけ切り抜いてコピーを作りまして、それを皆さんに差し上げたいと思っております。

ご承知のように、永山先生は、何かの折にお話ししたと思いますが、7年制の東京高校、今はもう無くなりましたが、東京高校に入られまして、その後、九州帝国大学経済学部に入學され、途中で学徒動員に遭いまして、海軍經理学校を経て、もう一度戦後復學をされまして、1947年に総理府統計局に入省されています。以上の詳しいことは、先ほど申し上げました「統計の散歩道」に出ております。

一緒にお手元に『季刊文化経済学会』の67号に先生がお書きになった回想記がございますので、これは1ページちょっとですのでコピーしてございます。私の種本はもっぱらこの二つでございまして、ほんとうはもっとお話をいろいろ伺って事前に準備するとよかったです。それは今日の皆さんのご質問の中でお答えいただくということとさせていただきたいと思っております。

第二次世界大戦後の先生の統計活動についてすぐに移らせていただきます。九州帝大時代の統計学というのは、高橋正雄先生に教わったそうで、その高橋正雄先生というお名前からわかりますように、統計学の **substantial** なことは教わらなかったということだろうと私は拝察しております。で、脇村義太郎とか、そういう人たちが日本統計学会の重鎮で控えていた頃の統計学でございますので。森田優三先生の『統計概論』というのがあって、唯一文系の学生の読むまともな統計学の教科書でありまして。その森田先生に戦後統計局長として仕えたというのが先生のスタートでございます。

【松田注記：『統計概論』は、森山書店から初版が出て、その後日本評論社から出て、それは後に久次智雄さんと一緒に改訂されてまして、現在でも版を重ねておりますが、最初の確か森山書店版から見ますと版も大きく、しかも随分厚くなっています。】

その統計局長の下に、伊大知良太郎先生(1908-1985)、後に一橋大の経済研究所の教授になられた方がいらっしゃいます。私もお名前もお顔も存じ上げておりますけれども、或る時、一橋大の経済研究所にいらした方が、溝口敏行さんのところに「ちょっとちょっとイタチ先生に会いたいんだけど」と言われまして、溝口さん、泡食って、あの先生は何階のここにいらっしゃるけど、お会いになるときは「イオチ」とおっしゃた方がよろしいですと、言ったという話が伝わっております。

永山：この「地」は、知識の「知」です。

松田：私がまた間違いました。今日は誤植が多いですなあ。その伊大知先生が研究部長という、組織のキャップに座ってらして、永山先生はそこで最初に手掛けたのが、家計調査の東京都の一ヵ年分の個票、その頃は世帯票というのがなくて、それから世帯票を復元するという仕事をされたというのが、先生の統計との付き合いになっています。その後、消費統計課長、国勢統計課長を経て、統計調査部長を経て統計局長になられたとゆうのが統

計局の世界での概略の歴史でございます。

統計局ではエースと思われた者は、私は外の者ですので、聞くところによりますと、消費統計課長に据えて腕を振るわせて、それで、国勢統計課長に据えて、地方、47 地方自治体とのいろいろ折衝に携わり、その後他の仕事をやって、仕上げで調査部長になり、その中で何人か残されたなかで統計局長になるとゆうふう聞いております。真偽のほどは知りませんが、伝説としてはそういうことになっております。

我々としては、よく知られていますのは、1976年に5年周期の調査として出発した社会生活基本調査、**Time Use Study**、これが大きな、先生がデザインされた世帯統計だとうふう伺っております。これは1976年に発足したわけですが、アメリカの労働統計局(BLS)が**American Time Use Survey (ATUS)**をスタートさせたのが1991年ですから、かなり早い時期に調査票をデザインされたとうふう伺っております。ただアメリカの**ATUS**は、これは毎月調査であって、**CPS**と連動する形のデザインになっている。**CPS**というのは、**Current Population Survey**です。それと連動する形になっておりますので、一定期間、10月の一ヶ月の中のある2週間だったと思いますが、24時間記帳ということで、季節変動を反映していないという点では問題がありますけれども、その後日本では、静態調査と連動して動態統計調査を新しくもう一つやるというのは無理だったということがあろうと思います。アメリカの場合は、**Current Population Survey**と、**National Crime Survey**、それが月次調査の二つの柱になっておりまして、その二つに動態調査は付帯調査として行うのです。日本でも、家計調査と労働力調査、この二つが月次の動態調査でありまして、その二つにいろいろ付帯調査をすることは可能なんですけれども、実際にはそんなにぶら下げてはいないということです。ただ、アメリカのBLS(労働統計局)による**ATUS**の発足と、日本と違いますのは、アメリカの場合には、学会を挙げてこの新しい調査をバックアップいたしまして、大きな**Conference**を開きまして、問題点を詰めた後で活動を始めたはずで、それで、3回ほど調査票の大きな変化があったと記憶しています。

これが日本の方では、学会がバックアップするというのは常態ではなく学会との間にギャップがあるというのが、日本の統計機関を取り巻く状況と申しますか、問題点であります。例外的な時期がありますのは、アメリカの占領下で統計行政が改革された時期で、先ほど申し上げました森田優三先生が総理府統計局長として就任されたのがそのきっかけであります。確か後で鎌倉市長になった正木千冬さんが財務省の統計をデザインしたとか、農林水産統計は、先般亡くなりました、100歳で亡くなったんじゃないかな、近藤康男先生がデザイン、いろんなものをデザインしていたのです。近藤先生が東京帝国大と兼任で農林省の統計課長をされたのですが、途中で戦争に入りまして、彼は特高警察に追われまして、それで辞めたのですが、戦後また農林省の統計局長に復活されたということがありました。各省庁に統計局があったんです。それが、だんだん、行政改革の結果として、局から部に格下げされ、中には部も無くなりました。統計局の研究部も研究課さらには研究係に縮小された筈です。それで、晩年の森田先生のところ遊びに伺ったとき、

「君ね、とうとう研究係になってしまったよ」とおっしゃってらしたことが非常に印象に残っております。森田先生としては、各国、ヨーロッパ、統計の先進国並みに統計の研究課と、それから調査部局とが密接な関係で歩けるようにというふうにデザインしたのだと思っております。ただ、これは非常に戦後の例外的な時期のことです。ただ、戦前も統計ということは特殊な業務だと考えられていて、幾人かの統計の、学者と呼べるかどうかわかりませんが、統計の専門家が統計局長には就任しています。そのとき幸い貴族院、戦後のデモクラシーの時代に幸いと言ったら叱られるかもしれませんが、貴族院（1980-1947）というのがありまして、偉いときでは男爵になりまして、それで、貴族院に籍を置いて、それで、統計局長にも登用されるというメカニズムになっていました。文化経済学会の初期の、初期に活躍した土方与平さんに私、うっかり「あなたのところはバロン土方の、子孫だったね」と言いましたら、即座に「バロンではない、コントである」と修正されました。（爆笑）男爵でない、侯爵ですか、伯爵ですかと言う事がありましたけれども、何人かは官僚として、そういう方がいらしたわけです。

統計制度も同じような行政組織のなかにあったわけで、古くは国勢学の名前が示すように、政治学の一分野として統計は考えられていました。ですから、高橋正雄先生の活躍する余地があったわけです。ただ、統計行政として、より重要なことは何かと言いますと、各種の分類の基準を政府が作っていたのです。その産業分類、職業分類、商品分類、ここにも誤植があります。標準疾病分類ではなくて標準商品分類です。疾病分類は厚生省の所管でした。こういうふうな分類基準というのは、統一的なものとして、必要なわけですが、これは、統計基準部、現在は政策統括官（統計基準）の所管になっています。各省庁の行政官庁としての縄張り争いと密接に関係しております。そうしますと、文化行政、文化活動に従事するものというのは、格別な所管省庁があるわけではございませんので、産業分類、職業分類に対して嘴を入れないと言うことで、文化庁がこういった統計に関して重要な事項に関して発言したという記録はどれもなさそうです。

このような状況にメスを入れる役割を果たしたのが、新国立劇場設立に向けて動き出した、三浦朱門文化庁長官の下での渡辺芸術課長（当時）の仕事であったわけです。そして、幸いにも三善科研が採択され、これがわが文化統計研究会の母体となったわけです。そこでその、芸術家調査を行った結果をもとにして、どうも芸術家というものは一筋縄では行かないということに着目しまして、それはいわゆる自営業として考えるのか、その時に教授職としてどこかの先生をやっているのか、それから何とも言わぬ職業に従事していて一過性の公演の度に雇われるのか、そういうふうな状態にあると言うのかもしれない。これは、やはり職業分類としては、分けなければいけないだろうということで、芸術関係の教授職と、芸術関係の自営と、その二つに分割するという事に成功しました。

その他さまざまなお仕事をされています。配布資料では、最初のページに戻っていただきますと、森田優三先生の「物価」の中に収録された著名な論文があります。「物価指数論」です。そういうさまざまな著名なペーパーがございますけれども、それはいずれ皆様ご自

分でお読みいただくということにいたしまして、永山先生への卒寿に対するオマージュとして代えさせていただきたいと思います。後、こうゆう点はどうだったのかというご質問を皆様の方からしていただいて、先生にひとつお話しいただくことにしたいと存じます。以上でございます。

4.1.2 討論

永山：詳細にお話しいただきましてありがとうございます。ただ、『統計通信』に書いたのはほとんどが法政大学日本統計研究所の聞き取り記録に入れてありますので、敢えて配る必要はないと思います。

松田：日本統計研究所の文献の方が手に入りにくいんですよ。

永山：ア、そうですか。

松田：はい。『統計通信』から取ろうということを考えて、実は少し途中までやりかけたんですが、失敗しまして、こういうふうな面白い記録が、統計基準部が潰れるのと一緒に「統計の道」も無くなりました。ですから、この中でいちばん長大な連載は、永山先生のもので、あとは私、他のものは捨てちゃったんですけどね、記録としては重要ですから、皆さんに差し上げようと思います。

永山：日本統計研究所の方は、この統計通信を元に膨らました感じになってます。

松田：はい、一応、森博美さんに聞いてみますけど、これだけの人数ですからいただけるかもしれません。

永山：僕は統計局に入ったときは標準偏差も知らなかった。そんなの出て来ない。でもやっぱり歴史を知っておくというのはいいことかもしれませんけどね。

松田：この「新世界」は、載ったときに面白く読みました。「季刊文化経済学会」のどこかの号に載っていたと探してみたら、幸いこれは全号の pdf を事務局が作ってましてコピーができました。

永山：これは載せていただいて、お恥ずかしいものですが・・・

松田：先生がお見えになる前に田才さんとお話ししてましてね、なにせ田才さん、ご承知のとおり、チェコの小説家のカレル・チャペックの翻訳家で、カレル・チャペックに「マクプロクス家の事」というオペラがございました。あれの作曲は誰だったんだろうと田才さんに聞きましたら、即座に「ありゃあヤナーチェクだ」と教えてくれまして・・・僕はあれの LP は持っているんですけど、CD 版がないんですよ。それでそれから二人の与太話になりまして SP 版から LP になってよかったなあと思ってたら、すぐカセットになり、それから CD になって、こう我々の一生の間に媒体が目まぐるしく変わる時代というのはなかったんじゃないかと、愚痴をこぼしてお終いになったんですけども・・・

【金城後注：2008年の11月に日生劇場で東京二期会、新日本フィルハーモニー交響楽団、二期会合唱団 http://stage.corich.jp/stage_detail.php?stage_id=9851】

松田：私は戦争に負けた後、灯火管制を気にしなくてもよくなりまして、夜の暗いシェードをひっぱってなくてよくなって最初に聞いたのが、姉がどこかから借りてきました、ドヴォルザークの「新世界」のレコードでして、勝手に掛けて、姉に叱られ「お借りしたので、高いものなんだよ」と聞いたのが最初だったので、なおさら印象深く物語として読みました。どなたでも遠慮なく（永山先生に）聞いてみてください。

4.1.3 社会生活基本調査について

松田：永山先生が社会生活基本調査をデザインしようと思われたのはどんなきっかけだったのですか。

永山：あれはね、かならずしも僕だけの発案じゃあなくて、なんかそれなりの雰囲気があって、それで、とにかくあまり経済的じゃない側面の調査をやるということで、やっぱり最初は、まず生活時間を考えて、生活時間というのは、24時間の記録で、大半の行動が1年だから、やっぱり生活行動というのを一緒にくっつけないと意味がないということになって、あのような調査票になりました。「生活時間」というのはなかなか難しいんですね、どこまでを取るかということが問題です。お墓詣りに行くというのは、お墓の前で手を合わせている間のそこだけの時間なのか、往復の時間なのかといったふうに。そんなふうに議論している間に、やっぱり1年間の行動をとった方がいいだろうということになったんです。1年間の行動をとっている国っていうのはあまりないんですね。それでオーストラリアなんかでもやってますけど、僕は、ある意味では非常に使えるし、いいと思うし、それから「生活時間帯」の統計というのが面白いですよ。前に、ちょっと雑誌『統計』にも書いたんですけど、大阪の人っていうのは、午前中に買い物に行くんですね。東京の人は午後行く。じゃあ統計で（「買い物時間」は、）出ているかというところとちゃんときれいにね、大阪の主婦の買い物の時間は10時から11時、東京の買い物時間はだいたい4時から5時の間にちゃんとこうピークが出るんですね。だから、統計も案外捨てたもんじゃないなあ... だから時間帯っていう統計っていうのは面白いと思います。睡眠時間も地域によってずいぶん違うんです。だからだんだん都会の深夜化とかね、そういうのがきれいに出てきます。

松田：非常に残念なのはあの調査(社会生活基本調査)の前身のNHKがやっていた調査で、それは、四季、四つの季節に行っていた、ひと月か何週かか忘れちゃったけれど、そういう調査をしておりましたね。あれの集計表が非常に雑で、個票が残ってたら再集計したいところです。途方もない調査でした。【松田後注：NHKの調査報告書は、復刻版があります。】

永山：はい。向こうの方が丁寧ですからね、うむ。

松田：はい。戦前の最後の時期、昭和十何年かな、そのくらいでしたけど、それと結びつ

けてみれば良いんですけどね...

永山：うむ。戦前の調査はどの程度残ってるんですか。

松田：集計表だけ、刊行された集計表だけ残ってますけど。ですから、それは都市部と農村部くらいに分かれていましたけれども。あれは要するに生活時間編だけとってね、せめて世帯主の職業別分類が可能な形になっていれば、非常によかったですね。

永山：ああ、そうですね。その点でね。

永山：最近「社会生活基本調査」の利用が増えていますね。デフレになってから、家計にも経済にも変化がないので、生活行動を調べようということになったのかも知れません。

杉江：「社会生活基本調査」は、いちばん身近な統計です。生活、文化など、直接はお金に換算できないが、社会生活の質的变化、1年間、どういう行動をしているのかが同じ年齢層でも異なっていることが判ります。

永山：たしかに「社会生活基本調査」は、とっつきやすい。統計局の本はあまり親切ではありません。例えば、日本統計協会の『統計でみる日本』などと比べると、政府統計は、料理して出さないと食べてもらえない。一つの料理法を覚えれば、使えるようになります。

永山：統計局には、製表部と調査部があって、製表部には女性が多かったです。社会生活基本調査の趣味・娯楽の調査項目は最初24であった。2回目の調査では、「パチンコ」を削除しました。理由は、なぜ政府がこんなことを調査しなければならないのかということでした。その後、「パチンコ」は調査項目として復活されましたが、項目が多すぎるという理由で、統計審査官の一人が「趣味・娯楽」の調査目の多くを外しました。

松田：米国で宗教を調査しないのは、ユダヤ人が多いからだそうです。

有田：知りませんでした。

杉江：社会階層と社会移動全国調査（SSM調査）で、以前片岡栄美さんが、「社会階層と文化」を見ていました。1986年、米国では大きな調査で行われた結果、社会階層が高いほど、多様なものを受け入れることが判りました。これは、フランスの社会学者ブルデュエの考えとは異なる結果です。日本ではどうかということ片岡がSSM調査を使って分析した結果、日本は米国に近いということが判ったそうです。しかし、パチンコ、歌舞伎、辞書類、女性週刊誌などがなく、物足りなさを感じました。社会調査の方が良いのでしょうか。趣味娯楽の項目を残してほしいと思います。

永山：囲碁と将棋などの項目をしっかりと設定すべきでしょう。

松田：芸術家調査にSSM調査を使えないかと思ったが、芸術家のサンプルが少なくてできなかったの独自に調査をすることにしました。

4.2 学生調査の母集団復元手法の提案（永山）

永山：「学生調査」（「学生の芸術意識と芸術活動に関する調査」）の分析に当って、どうフ

フレームを作るのか、復元乗率はどのくらいかという問題があります。

学生調査第1回から第5回の共通パターンを見つけます。そして学校基本調査と比較してみます。たとえば、単純平均の割合を求め、各回の「ブレ」を見るという方法があります。目的が「標準化」なら、理由がつくものは、なるべく近づけてもいいのではないのでしょうか。時系列的変化や、サンプルの偏りを考慮する必要があります。（図9）

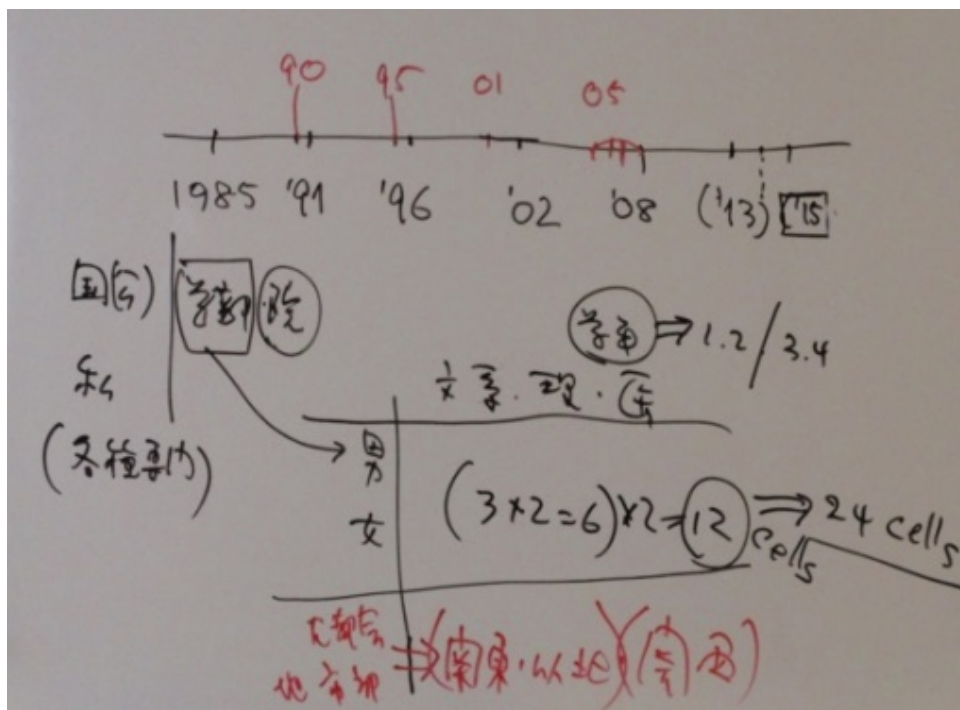


図9 板書

杉江：第1回から3回までの調査を仕切りました。1年生や文化系が多かったです。

有田：学生の質の大幅な変化がありますね。学部も様々ですから、基本のフレームを一つにしているのかが心配です。

松田：調査の前に考えたのは、国公立・私立・(各種専門学校)について、表1のような分類でした。

【12セルで表示した場合】

表1 調査前に考えた調査対象の区分

学校の種類	性別	文系	理系	医学系
国公立大学	男			
	女			
私立大学	男			
	女			

【金城後注：表1および表2は板書を基に再現を試みたもので、松田先生の書かれたものではありません。】

つまり、 $(3 \times 2) \times 2 = 12 \text{ cells}$ で考えようとしていたんです。それに、学年を1・2/3・4年の二つのグループに分け、最終的には24cellsで設計しました。（表2）

【24セルで表示した場合】

表2 調査前に考えた調査対象の区分

学校の種類	性別	学年	文系	理系	医学系
国公立大学	男	1・2年			
		3・4年			
	女	1・2年			
		3・4年			
私立大学	男	1・2年			
		3・4年			
	女	1・2年			
		3・4年			

しかし、大学数は年によって異なっている。大都市/地方都市を分けるより、(関東以北)と(関西)を分けて考えた方がいいのかもしれない。体育学部は文系なのか、理系なのか。文系は、芸術・非芸術，教育系・非教育系の4つに分類できる。純粋な医学系は、福祉系を含めて少ない。（図10）

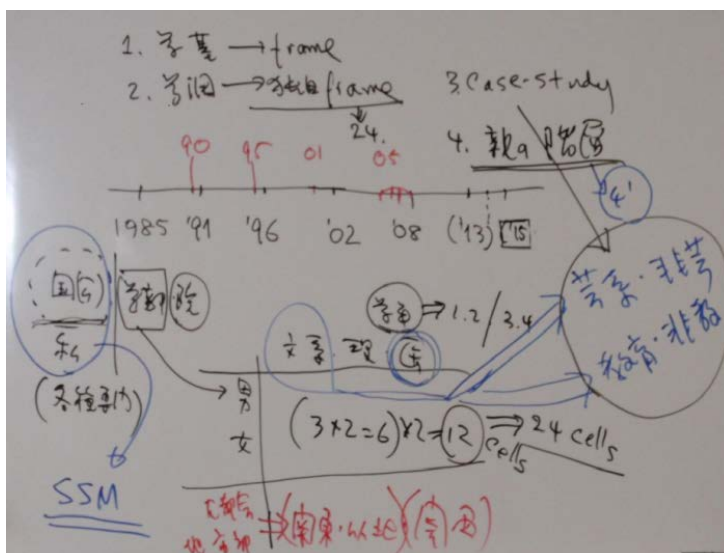


図10 板書

○永山先生のレジュメを読んで（松田）

①学基（「学校基本調査」） → frame

②学調（「学生の芸術意識と芸術活動に関する調査」） → 独自の frame

③Case-study

以上の3段階を踏むと少し傾向が見えてくるのではないか。

別の問題として、学生の社会階層の変化がある。

④親の階層に準拠したSSM

24cells方式は止める。なぜなら、昔は、公立は貧乏人、私立は high society という分類が成り立っていたが、今は、それぞれ分解しているので、年次の違いや国公立の違いはないからだ。

いちばんサンプルの多いのは第1回調査（1985）である。

松田：2015年に簡易な follow up 調査をしたいと思っています。

永山：まず、第1－5回がどう変化してきたのかが見られるようなものが見たいですね。

その上で第6回調査をやるのでなければ、比較の対象がないので意味がないと思います。関西グループと共同で作上げる形で、原案はこちらで作っても、まず、機械的に単純平均を作って、見てみたいです。

5. 2015 年度第1回文化統計研究会記録

開催日時：2015 年 5 月 3 日（日）13：30-17:00

開催場所：国際文化会館西館セミナールーム 402

出席者：有田，折橋，金城，原，古屋，松田（五十音順敬称略）

配布資料：「学生調査 年次データ作成手順」（全 9 ページ）

【概要】

1. WG 班からの中間報告（その 2）「学生調査 年次データ作成手順」（有田）
2. 報告書 B 巻末資料「年表」：年表班の活動報告および討論（折橋・古屋）
3. 今後の活動予定の再確認など

5.1 WG 班からの中間報告（その 2）（報告者：有田富美子）

5.1.1 復元乗率による再集計の方針

現在，学生調査についての時系列分析を手がけている WG 班から，第 2 回学生調査（1991 年実施）についての分析試案についての 2 回目の報告が，配布資料（「学生調査 年次データ作成手順」）に基づいて，以下の通り行われた。

A.目標：集計データの偏りを調べること

B.分析対象：大学のみに限定し，男女不明，学部不明のサンプルは削除。

C.作表：各年次 4 回分

- ①男女別・学部別・学生調査の回収標本数と学校基本調査の学生数
- ②男女別，学部別，学生調査と学校基本調査の学生数，男女比
- ③男女別，学部別，学生調査と学校基本調査の学生数，学部比
- ④男女別，設立主体別，学生調査と学校基本調査の学生数
- ⑤男女別，設立主体別，学生調査と学校基本調査の学生数，設立主体比

D.マッチング

ウェイトをかけると，学校基本調査の学生実数になるようなウェイトを作成した。

ウェイト作成条件 1：累計単位を，男女別 設立主体別 地域別とする。

設立主体は，国公立を統合，国公立と私立とする。

・北海道・東北地域を例示すると，マッチングの単位が北海道，東北，私立，女では，実数は 19,817 であるが，学生調査サンプル数は 14 であるので，ウェイトは 1415.5 になる。

・九州・沖縄地域で，マッチングの単位が九州，沖縄，私立，女では，学生調査サンプル数は 30 であるので，ウェイトは 693.8 である。

ウェイト条件 2：累計単位を，男女別，学部別とする。

男女別・学部別で、学生調査のサンプルが0の場合は、そのケースを計算に含めない。例：男・家政学部

・ウェイトが、異常に大きなものがあり、適切ではない。

5621.0 (芸術・男), 3121.9 (理学・男), 1464.2 (理学・女),
1111.7 (家政・女)

E.学生調査 ウェイト修正例：リアルな調査学生数 全 3007

例：Live 3 今までにオペラを見たことがある

・関東地区 国公立 女 108.4, 関東地区 私立 女 896.5

5.1.2 暫定的分析結果

暫定的な分析結果が示されたが、これまで、標本設計の経緯については、十分に検討することがなかったため、以下のような問題が存在していることが明らかになった。

1) 国公立を一括せざるを得ないのではないか。

理由は、サンプルは、国立が多く、公立が少なく、全国を6地域に分けた場合、3地域しかカバーできないからである。

2) 県単位に分けて分析はできない。

理由は、サンプルのほとんど得られない県が多く、また、近畿では、国公立では男性が少なく、女性が多く、私立では、九州では女性が少ないからである。

3) 北海道は東北と一緒に地域とする。理由は、北海道のサンプルが少ないからである。

5.1.3 討論

質疑では、大筋で試案の分析方法が是とされたが、松田から以下の①-③の提案やコメントがあった。

①分析対象を大学のみに行っているが、高専・短大の全国ベース（男女別）でも集計する必要があるのではないか。短大・看護養成所等、各種学校などとしての高専など、特定の地域でもいいから、または全国で男女別でも良いから見てほしい。

②年次による歪みも知りたい。

③累計結果の活用方法としては、調査10年後の学歴効果があるかを社会生活基本調査との比較で見ることではないか。学生時代の生活習慣がその後の生活に及ぼした影響を確認したい。

有田：マッチングキーとは別に、理工系は使えないと原稿には書きたい。

松田：400以上のウェイトは使用すると危ない可能性がある。

その他、ウェイト修正の例として挙げられた「Live 3 今までにオペラを見たことがある」に関連して、これまでのオペラ鑑賞状況等についての話題が出た。

5.2 報告書 B 巻末資料「CD-ROM 年表」：年表班の活動報告（折橋徹彦・古屋憲章）と討論

5.2.1 活動報告

折橋から、年表班を代表して、年表作成の方針についての質問があった。

年表の作成対象期間 1985 年以降-2012 年までを捉える予定であるが、1985 年以降の文化状況は、2014 年度第 10 回文化統計研究会（3 月 22 日実施）での佐々木先生の講演によって、政府の関係省庁では、1985 年以前は、ポピュラーは助成金対象の芸術ではないとされていたが、バブルが弾けた 1990 年以降はポピュラーも一概に助成金の対象外ではないからといって、対象外として良いのかどうか、

ポピュラーをどう考えるか。芸術の範囲の吟味が必要であるとされ、これまでは細かい分類がされていた伝統芸能がひと括りにされているという状況になっている。こうした文化状況を、それを年表にまとめ上げるのは至難の業である、どのような視点での編集方針が年表班に期待されているのかという、問いかけが行われた。

それを受けて行われた意見交換では、三善科研の報告書の年表には、芸術だけでなく、社会事象も併せた年表にしたが、その作成には、大久保（駿河大教員、当時一橋大で助手として勤務）が折橋の荻窪の家に日参して手伝ったというようなこれまでの年表作成の経緯なども話題に上った。また、折橋の要請で、松田が以前から当研究会で語ってきた、穢多非人の話、所得階層と芸術鑑賞についてのサマリーが再度、語られた。

【以下松田先生のお話】

折橋メモにもありますが、1990 年のソ連崩壊は、ある意味では大きなエポックメイキングな出来事であると思います。（板書が始まる）

明治から土農工商穢多非人の河原乞食の世界から始まって、いわゆる西欧文化というのは、河原乞食ではないという概念が、明治になってから入ってきました。河原乞食と言う意識に繋がるのは、一応、江戸時代の初期に遡るもので、それとの境界があいまいなものが琴三味線、これは花柳界に繋がるいわゆるお座敷藝でこれでは西欧音楽とは繋がらないから仕方がないから、太鼓叩いた軍楽隊から始まったわけです。初等教育で、西欧風な音楽教育が唱歌から始まってきたわけで、これは軍歌の世界とも繋がります。

軍楽隊から、オーケストラになって、それを需要する聴衆の層ができて、オーケストラの演奏会に聴きに行く聴衆の層ができてきたというのが、大正期です。これが、いわゆるミドル・クラスの形成と並行しています。これはヨーロッパでも同じですね。1870 年代にヨーロッパでオーケストラが中産階級の支持を得て、定期演奏が始まったというのと、約百年遅れて、大正期に入って、そのモデルができたということです。

河原乞食が歌舞伎に変化したのに対立するのが伝統の能狂言です。能狂言に相当するのがヨーロッパの、1700 年代から始まったオペラだと思うんですね。でも、これはね、定着しないんですよ。大正期になって、昭和期になって、昭和期になって藤原歌劇団とか、そういうのが出来始めて、流行りそうになったんです。中産階級の上の階級の支持がないと

オペラのパトロンっていうのは形成されません。パリのオペラ座が示すように階層社会の中で成立していました。(図 11)

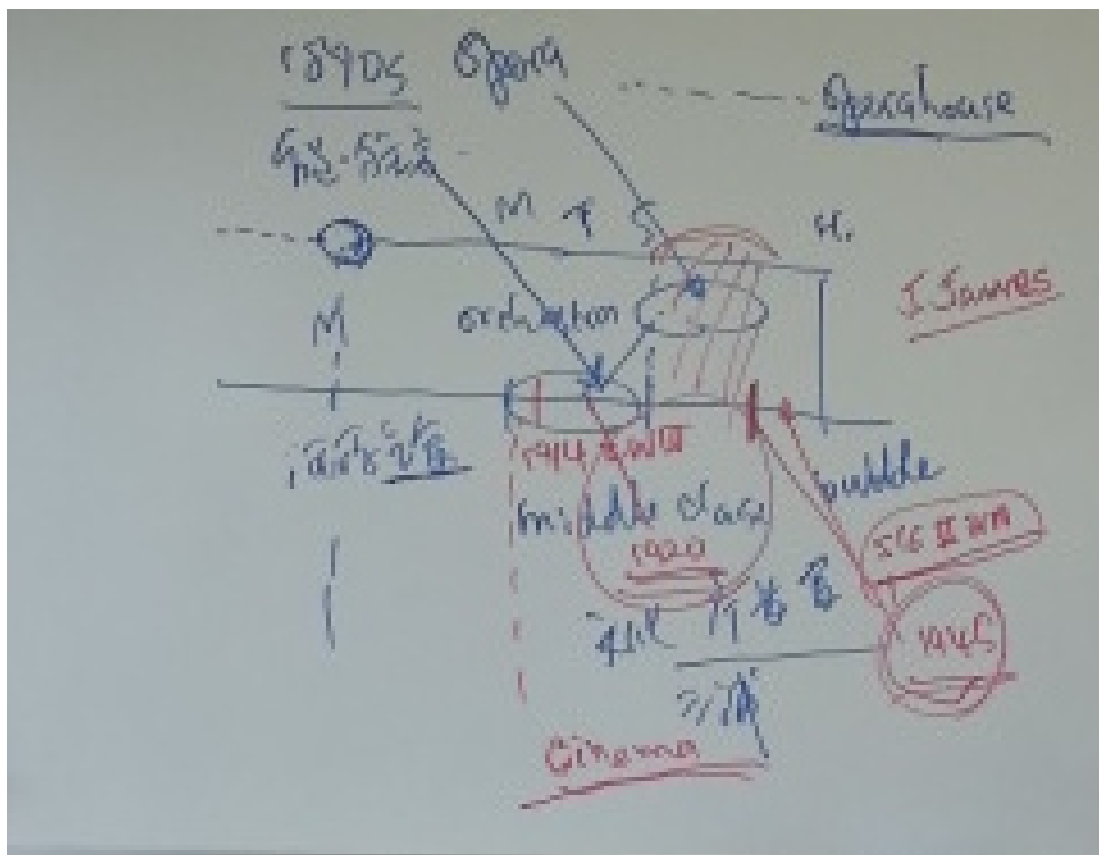


図 11 板書

それで、昭和期の戦後のバブルの時期があって、なんとかなるんじゃないかと言って、オペラハウスを建てようということを考えたのが、三浦朱門が文化庁長官だったときの芸術課長の渡辺さんでした。そういう流れだったと思います。渡辺は、当時ユネスコから帰ってきて、日本にもオペラ劇場を作って、行く末は歌劇団も育成しようと考えていました、オーケストラは一応あったから。渡辺は、1875年にできたオペラ座[ガルニエ宮]、オペラ座がバスチーユに移る(1989)前の時代、「シャガールの絵」が天井にあったオペラ座の時代に、あすこに通っていました。ヨーロッパの外交というのはオペラ劇場を通じての社交というのが不可欠であったと、彼は確かに考えたのだと思います。だから、第二の鹿鳴館が必要と考えていた。

ところが、その大きなこういう流れを見ると、もう一つ大正期、1914年に第一次世界大戦で、1920年がロシア革命です。この1920年のロシア革命の作り出した文化が、ある意味で昭和期を通じての文化人にとっての憧れの星であって、これは日本だけでなく、ヨーロッパ社会の知識人にとっても憧れの星だったんです。この第1次世界大戦の戦後世界で、ここから、いわゆる表現主義であるとか、プロレタリア文学であるとか、そういうふ

うな様々な前衛芸術がここから出てきます。

昭和 16 年 12 月 8 日に第二次世界大戦がアジア全域に拡張し、その前に日本は大陸侵略でずいぶんと金をつぎ込んだけれども、あれは何とかして、日本としてはバランスを取ろうとしました。これが 1945 年で大失敗に終わって、日本は食うものも喰えなくなったということです。その頃、いつも細々として歌舞音曲で飯を食っていたのは、国勢調査の有業人口の 10%くらいだと思います。芸能関係のところで飯を喰っているというのは、戦意高揚とか銃後の産業の振興とか、とにかく人を働かせるには歌舞音曲が必要だと言うことは政府も知っていたと思います。

そして、ここでもう一つ重要であったのがキネマです、今の表現ですと映画です。昭和期というのはこういうものが一斉に花開きました。だけど、これらは戦争に負けた途端に一応決算をしなければいけないわけで、一応、総決算したわけです。しかし、戦時中は慰問だとか戦意高揚だとかということや、工場の生産性向上とかいろんな形でみんな細々と歌って踊って飯喰えたんだけれども、それが（敗戦で）飯喰えなくなっただけでなく文字通り食うものがなくなったんです。

何をやったかという、「日本文化を守る会」という鑑賞組織を立ち上げました、労音の前身と言えるのかもしれませんが。「日本文化を守る」というからには僕らは、てっきり能とか狂言とかそういうのが見られるんだと思ったら、「日本文化を守る会」というのが今度公演会をやりますから、みんなで見に行きましょうと（言われた）。何を見たかっていうと、「白鳥の湖」。（笑い）それから、藤原歌劇団だったと思いますが、確か、「ラ・ボーエム」かなんかを上演したわけです。当時は、映画館を改造して、映画館を舞台にして、私の中学生のころの小樽でも公演をするわけです。歌劇団だから、オペラもするし、（劇団員は）皆、腹空かして来るわけですから、どっかで飯、喰わせていたんでしょう。そこらのところは、僕には判らないけど。それを賄ったのが日本文化を守る会だったんです。

日本文化を守る会では、さすがにそれは守り切れなくなってきて、それで、「労音」が出てきたのではないかと思います。勤労者音楽協議会（1948 年 11 月に設立）が出て来て、それで労音の小樽の理事長かなんかやっていた新制中学時代の同級生にわたしは講師として招待されて現代音楽について喋れと言われてましてね（笑い）、それで、シェーンベルグの 12 音階音楽の話と Thomas Man のドクトル・ファウストと結びつけて話をして顰蹙を買いました。塩を撒かれて、お前のはなんだと言う話になるわけです。

そういうふうな形で日本のいわゆる西欧系の音楽は細々食いしのでいたら、何とかバブルが来たんで、一息つけたというわけです。それで、だいたいオーケストラは一万人の人口があれば定期演奏会ができると言われています。定期演奏会と小中高校に学校音楽教室をやると採算とれて、それで常雇いの 2 管編成のオーケストラは維持できました。しかしオペラを何とかやっていくためには恒久的な財源が欲しいってことで、オペラの振興の、オペラには楽隊屋が要るんだからということで、助成金を引き出して、何とか文化振興基金が出来て、それらの様々な助成金で活動できるようになりました。だいたい東京都には

人口が約千数百万いるわけだから、オーケストラは確か 10 くらいあるはずで、それで、百万都市で仙台、札幌、それから九州では福岡、それから大阪に幾つかと、まあだいたい、大阪は人口に比べてオーケストラの数が少し少ないけれども、名古屋フィルと、だいたい人口百万当たりで金を払って定期公演に来るといふことでしょうか。そういうことで何とか採算とれるといふことで、皆楽隊屋さんがそれで息をついたといふことです。

それで、その間に、音楽系の大学をたくさん作って、そこに良家の子女を押し込んで、教育を始めたといふこと（いふことです）。それで、卒業したらどこか（働く）口を探さなきゃいけないから、また、働ける場を作らなきゃいけない、小中学・高校の音楽の教師では数が限られているし、やっぱりオペラハウスが要るよといふようなことで。コーラスは、質の高いコーラスは一応できるけれども、プリマを歌う主演の俳優がないという状態でした。だから、二国（第二国立劇場）でも未だに、主演級といふのは、海外から連れてきたのに歌わせているという状態が続いています。その分野で才能が要ると、そういうふうな話でした。

要するに、中産階級作って、そこそこの音楽はできるけれども、ジーニアスは、天才はさっぱり出て来ないという形になっていたといふのが、1980 年代のバブルの崩れるところまでの状況です。

それから後を、どう料理するかといふのは、折橋さんのアイデアを借りなきゃいけないといふことになる、といふのが、私のおおまかに書いた粗筋です。

5.2.2 討論

金城：今のお話しだと、折橋年表班と松田編集長の間でボールを投げ合っているだけで、どこにも落ちませんね。

松田：はい。キャッチボールのキャッチャーがいません。

金城：ちょっといいでしょうか。報告書 A の年表を作るのは折橋先生や年表班の人達が楽しみにしているようなんですけれども、そもそも松田先生が報告書 B に年表をつけたいといふのはどうしてなのでしょう。

松田：といふのは、ここからここまでの（板書で明治から・・・まで）一連の流れをはっきり年表の中に入れておきたかったんです。

金城：でもそれは、第 1 回学生調査を実施した 85 年からではなくて、もっと別のことですね。もっと前からの流れですよ。

松田：三善科研の年表の前のところも訂正しなければいけないと思います。

折橋：だから、1985 年以降は入らなくってもいいような気がするが...

松田：いやいや、85 年以降は、中産階級のオペラという玩具ができたんです。玩具をささえるための構造といふのはまだわかっていません。そのところをどう書くのか、それは年表の中にどう入り得るかといふことなんです。

金城：入らなくってもいいのですよね。どうしてかといふと、その状況は統計班が出して

いるデータとして出てくるわけですから、その前の段階、その統計調査が行われた段階での状況がきちんと年表で押さえられていれば、何月何日に何があったではなくって、こういう流れで変化が起きてきたんだというそこまで、しっかり押さえられていれば、Bの年表は事足りるのではないんですか。

松田：そのね、事足りるかどうかには自信がありません。こないだの佐々木さんの話（3月22日の研究会ゲストスピーカー）ですが、若松美黄がいたら、どう言ったか...

金城：でも、あの佐々木先生のお話は、今、報告書Bでまとめようとしている調査報告を超えるものですね。

松田：ああ、あの調査の中には入っては来ません。ほとんど入ってきません。だから、要するに、統計調査のデザイン上、（板書を指して）こういうところをどう国勢調査で現代の芸術の動向というものを押さえるのかという、統計調査のデザインのところにかかっていくんだということです。

金城：（報告書Bの）最後の提言を書くための証拠として、証拠状況として、年表という形で挙げておきたいということですか。

松田：はい。というのは、数字では、永山先生がおっしゃるような数字では、社会生活基本調査ぐらいしか使えないと、踏んでるわけです。

金城：そうするともう、折橋先生、（折橋先生の質問メールの）最後のところにある「...リーマンショック、アベノミクスなどの変遷が頭に入っていなければ年表作成作業は不可能です」、これはもう、折橋先生の頭の中に入っているから、不可能ではないですね。

折橋：でも報告書Bのところに、それをどう入れるかっていうのは、今の松田さんの話だとね、中産階層は崩れてないわけですよ。ね、崩れてないで、松田さんの頭の中でミドルクラスってあるでしょう、だから、ミドルクラスをどうとるかってことが問題になるわけですね。で、僕がこないだ、古屋君に言ったのはね、結局日本の社会構造の問題でさ、僕は統計、よくわかんないけど、ミドルクラスっていうのは、大正期なんかのね、ミドルクラスと、戦後になって出てきたやつか、たとえば大学の数だって、がんがん増えるわけじゃないですか。そこでこう変わっちゃうんじゃないかと思うんです。たとえば、戦後の大学っていうのは、幾つあったのか知らないけど、書いていないわけですよ。ところが、1980年か70年か知らないけど、やたらと大学ができるじゃないですか。で、そのときに、皆いろいろのところに就職して、全部、自分がミドルクラスだと思っているんだよね。ところが、思っただけで、戦前、ミドルクラスって言ったら、今とは全然違ったんです。だから永山先生と僕との違いくらいあるわけですよ。永山さんは、確かにミドルクラスだったと思いますよ。いわゆる中産階層で、産があるのです。折橋は社会学なので日本には中産階層はないと考えています。欧米の中産階層は、産があるのです。勤労者の中流所得者ではないのです。松田さんが考えているのは、大正時代のミドルクラスだと思います、大正から昭和の初めにかけてのね。だから、野球を見に行っただけで、そいつらが何とか入場料を払って野球を応援したり、ディズニース

ンドへががが行ったりしたときの、その連中ではないような気がするんです。

松田：でね、さきほど猪木正道（政治学者、京都大学名誉教授の）の話が出たけれど、今朝の讀賣新聞に息子の（経済学者の）猪木武徳教授が面白い話を書いてましてね、最近、文部省が人文社会科学系の、教養系を潰すと言うカリキュラム構成を考え始めたというのは、非常に大きな問題だということを書いているんですけれども、その息子の方の猪木君の頭にあるのは、僕が考えているような、やっぱり中産階級で、中産階級が持っている人文社会科学系の教養というものが、ここで無くなると言っているんです。全部、いわゆる専門学校にしてしまったら、工業専門学校、観光学校なんかにしてしまったら、教養なんて要らないですよ、これでいいんだろうかという話なんです。折橋さんはそれは中流所得者で中産階層ではないという説ですね。

だいたいジニ係数で0.3くらいという時期っていうのは、0.3から0.35までというのが日本の中産階級を支えている平等度の度合いとしてずっとあったわけですが、それが今、急速に崩壊しつつあって、おそらく、ジニ係数はもっと上がっているんじゃないかなあとと思います。それで、一応、橘木・大竹論争ってのがあって、大竹君は年金所得者のところに高所得者の割合が移ったからだという説を出していて、橘木は、彼の小樽商科大学時代のお師匠さん（日本経済史の安孫子麟教授）の影響か、もうちょっと貧乏だ、貧乏化して両極分解しつつあるんだと言っているわけだけでも、中産階層が出来たと言う点ではあまり相違はないでしょう。僕もね、両極分解し始めるんじゃないかとね、思ってます。末はアメリカ型になるのかなと思ってます。

日本の中間層は、昭和期の初期に東京でオーケストラの定期演奏会を支えることが出来るようにみえたがそれは公共放送があったからです。所得の不平等度がジニ係数で0.35程度になりましたから一応中産階層が成立したといえるでしょう。

橘木・大竹論争で日本の戦後の平等度の議論がありましたが、中産階層が出来たと言う点ではあまり相違はないでしょう。

田河泡水は、戦前は「マンガの缶詰」などに前衛的な漫画を発表していたが、その後は「のらくろ一等兵」から大陸侵攻の漫画で人気を得たり島田という漫画家が描いた「冒険ダン吉」という、当時の表現では「南洋の土人」の漫画であるとか...こうなりますと昭和初期の岡本一平の文人画的な漫画とは異質になります。むしろ山中峰太郎の「敵中横断3百里」であるとか、平田晋の「昭和遊撃隊」とか、「新戦艦高千穂」であるとか、海洋の軍事小説になります。大戦末期の海野十三のSF小説とかがわれわれの子供のころの愛読書であったと思います。

それで、稲垣君は今日は来られなかったのですが、稲垣君に計算して欲しかったのは、彼の専門はモデル・シミュレーションなんです。それで所得分布を、いったいどういった形でモデル・シミュレーションやって、所得分布を変動させ得る要素をずっと捉えてみて欲しいということを考えてきました。これが一つのポイントなんです。

もう一つ、これも今日来られなかった山口君にやってもらおうと思っていたのは、社会生活基本調査の結果で、どういうことや仕事に人が忙殺されるのかを解析してもらおうと思っているのです。最近の人が遊ばないのは、歌舞音曲に《歌舞音曲停止令》が出たんじゃないんですよね、歌舞音曲停止令と同じくらい皆は遊びには行けなくなっているんです。爺さん婆さんが隣のお家に住んでいるから子供の面倒を見てくれるからと、音楽会に行けるわと、芝居を見に行けるわと、そういうふうな時代はもうなくなりつつあるということです。その御爺さん御婆さんは急速に養老院にでも押し込んでしまわれたようなのです。そうすると、社会生活基本調査で一応表面的には鑑賞率が高まっているように見えるけれども、実は、それは実質的に生活時間で鑑賞に使用できる時間は無くなります。それ以外の要素[仕事と食べることと寝ること]で時間をとられて出来なくなりますよというあたりのシミュレーションを、やはりここは稲垣君と組んで、山口君にモデル解析をしてもらって、シミュレーションをしてもらえばいいのではないかというふうに思ってるのですけどね。

問題はそうすると、ライブを見にいくのはそういう状況で難しいとすると、じゃあ、レコード・ラジオ・TVなどのいわゆる《缶詰》でいったい人は満足するのだろうか、しないのだろうかということです。全国消費実態調査で故寺崎君に昔やってもらった耐久消費財の保有が、上級財と下級財で所得格差に伴って分布が違っていた状況が、今はどうなっているのだろうかというのを再計算できないかということです。そこらのところになると僕はさっぱり判らないんですけども、TVのハイビジョンとか、なにやらああいうふうなもので見る缶詰【デジタル化されたもの】で、皆ほんとうにどこまで満足してるんだろうかと思うのです。ほんとうはそういうふうな鑑賞じゃなくて、自分達で演奏・実演していききたいというのが皆の関心なのか、というところを押さえる必要が統計調査としてはあるんじゃないでしょうか。

そこのところを、どう押さえたらいいのかということは、要するに、学生調査に出てくるのは、芸術鑑賞に関する一種の識字率というのが、コンピュータは使えるけれども、電子機器は操作できるけれども、ライブを見るという素養がなくなりつつあるんじゃないかという、そういう状況に今、日本は突入しつつあるんじゃないかと思います。1990年にソ連が崩壊し、そのころからライブを見る素養が無くなり始めているのではないか。もうオーケストラをいくら作っても、いくら補助金を出しても、もう若い者は劇場には来ない、ということになったら、自滅せざるを得ないじゃないかと思います。そういうところをどう考えるか、うまくさえられるかというのが年表班の、社会の状況を押さえるキーノートであると思うのです。

【質問と討論】

金城：それは難し過ぎますよね。年表に仕立てるんですよ。

松田：年表に、そこところの要素が入っていればよい、文章は誰かが書くでしょう。

金城：そうすると、折橋先生、報告書Aの方の作業をどんどん進行するしかないですよ。

松田：僕はね、報告書 A は、しばらく忘れていてもいいと思ってるんだ。

金城：それは、そうなんですけど、年表だけ作るということは非常に難しいことじゃありませんか、

松田：いや、報告書 A を作るよりも報告書 B のために、むしろ有田さんたちから出てくるデータの解釈を少し若い人たちを入れて議論して欲しいんですよ。

金城：では、年表は無くてもいいといいことでしょうか。

松田：いいえ、あった方がいいでしょう。2012 年までは細々入るでしょう。一応今お話ししたようなことがちょっと入れればいいでしょう。

金城：松田先生が報告書 B の頭のところに、今話されたようなことをお書きになれば、それで済むことじゃないのでしょうか。

松田：いや、やっぱり事実のエヴィデンスってのが要るから、そのところで年表はリファアされなきゃいけない。

金城：では、逆に言うと、それを先生が文章に書いてから、それを年表に落とすといった方が、年表を作る人にとっては親切なんじゃないでしょうか。B の附属としての年表なら。

松田：むしろ私が期待したいのは、学生調査なり、何なりの将来予測として、いったいどんな芸術鑑賞能力というのが皆に付いてくるんだということを考えてみたいんです。

折橋：今、松田さんが言ったことの中に、将来に対する絶望的な、素養のない連中が出て来るのではないかという考えがすでにあるのではないですか。それで、松田さんの考えでは今の若い子たちの AKB とかは、もう芸術とかではないわけですね。だから、芸術家調査っていうのは、芸術家の形成と生計の調査の中では捉えられないんですよ。というよりか、佐々木さんの言う、1985 年以降の芸術っていうのを通して来るんでしょう。松田さんは、85 年以降、大衆が失うものは芸術ではないという言い方をしたじゃありませんか。そこで松田さんの話では何とかじゃないというものは落として、芸術の分類から除外して、何とかであるものだけがね、こういうふうになるよと、あまり芸術を鑑賞する素養のあるものは出てこないだろうというのが年表に出てくるのではないかということでしょうか。

松田：いや、年表に出て来るかどうかはわかりません。要するに、最後の第 5 回目の調査が、集計がきちっと上がった段階になったとすると、その後、すでに 20 年が経っているわけだね。それで、今後どうなるかというふうに予測できるかは...

折橋：最後の調査はいつだったのですか。

有田：1 回目はバブルの最盛期で、2 回目がバブルが終わった頃ですね。

折橋：最初が 85 年、次が 91 年、

松田：第 5 回は、2005 年です。

金城：1 年ずれましたから、2006 年です。

有田：10 年前ですね。

松田：それで、倉林先生などとオーケストラの聴衆調査をずっとやってきました。後には

芸団協の協力で小生が聴衆者調査を行いました。だから実際にどれだけ聴衆が増したかというのは僕には、疑問です。それで、僕が昔非常に印象的だったのはね、...本当に昔々、大学院の学生みたいなもので、フルブライトの奨学金でアメリカでふらふらしているときに、BSO (The Boston Symphony Orchestra) に通っていたんですよ。そうしたら、同じアパートメントに住んでいるハーヴァードの大学院生連中が、オイお前、また行くのかって言ってね、お前は何で行かないんだ、おれは天井桟敷で安い回数券を買っているんだが、当日券でもっと安い学生券が手に入るじゃないかって言うと、いや俺はドレスアップしなきゃいけないから俺は嫌だって... だいたいそのう、このジーパンでセータ着た格好で行くわけにいけないだろうって言ってたのが非常に印象に残っています。一応上着を着るのが彼らにとってのコンサート行きのお作法だったわけです。

折橋：それは、1966年か7年ですね。

松田：80年代になってまた行った時も同じじゃないか。81-82年になってこんどは国立大学の安月給取りで行っても。そのほか、アムステルダムで2、3カ月暮らしてたときも、あれ、何年だったかなあ、90年代に.. でもねえ、コンサートへヴォウに若いのが、やっぱりいるんだよ。

折橋：ドレスアップして来ているのがいる若者がですか。

松田：うん。でねえ、最近人に誘われてN響の定期演奏会に久しぶりに通ったら、まあさらに老化しているんですよ。僕と同世代とおぼしき人々が大勢来ているんですよ。

折橋：老人会ですね。年寄が元気になって、結構行くんですね。

松田：これはね、そのう、二国に行ってる時さあ、ロビーで皆がしゃべってるのを聞いているとね、おばあさんたちがね、私、今年何回ヨーロッパに行ったとか、オペラを何回見て来たとか、そういう話をしてるんですよ。このおばあさん達、金があるんだなと思ってあきれたんですが、だけど若い人には一向に会わないんですね。

折橋：ちょうどオレオレ詐欺に狙われるような人たちか...

有田：それも先に数字を出してからでは、とてもじゃないけれど間に合わないの、

松田：一応の年表ができてほしいというふうに思ってるんです。

有田：そっちはそっちで

松田：年表は年表で作ってくださいよ！

折橋：古屋さんのところで、できるだけことはやってみて、それが競合できるかどうかですね、

金城：あのう、古屋さん、松田先生が今期待していることが一応語られたんですが、それって納得できますか。

古屋：この年表作成サンプル資料形で並べて行けば、なんとなくは見えるんじゃないですか。

金城：始まる前に、話していたんですが、有田先生がこの表頭の項目だけでは足りないんじゃないかとおっしゃってました。

古屋：ああ，なるほど。

金城：この右側に，もう何項目か必要じゃないの，現代を捉えるなら。

古屋：あ，わかりました。

折橋：社会的なあれね，

有田：AKBが入るところ。

松田：左側と右側が足りないんですね。要するに，国民生活・文化メディアのところね，
ここがもっと細かくなければいけないんじゃないかな...

古屋：ほおお。

有田：ああ項目じゃなくて，内容がね。これは例ですから。

松田：例なんだけれどさ，例の取り方が狭すぎるんですよ。

古屋：あ，これはですね。前の電話帳【三善科研の最終報告書のあだ名】のをそのまま使
っただけで。

金城：これは「生活」じゃないんですよ，イラン・イラク戦争は。

有田：これは生活じゃなくて，どちらかという政治外交問題なんで..

金城：やっぱりもっと生活っぽいことですよ..

松田：で，右側の方にもっと入るんじゃないかと言うのは，どんな..

有田：一つは，オペラハウスができて，鹿鳴館の二の舞だというならば，この時期に関し
ては，そういうものが乱立したわけだから，そういう項目があつていいんだと思うん
ですね。それから，今，上野の森で春の音楽祭をやってますよね。あの辺の，そういうイ
ベント系とAKBも一緒にするのは，ちょっとまずいでしょうか。

古屋：クラシックオペラのところに入れるのですか。

有田：入れるとすると，クラシックオペラの上の方に入れっちゃっていいのかな...

松田：クラシックオペラじゃないと思います。

有田：違うと思います。ちょっと違うけど，まあ幾つ入るか判らないんだけど，私が思
うのは，少なくとも，建物と，聴衆の層が，年輩がクラシックに行つて，若い人たちは
AKBに行つて，サッカーに行く人たちはオペラに行くのかなとかね，まあ，いろいろと

松田：そこらが知りたいわけです。

有田：ほんとうは「世代」の項目が欲しいけど，そこいらはたいへんだとすれば，そこは
已むを得ないなと思います。AKBのところを幾つに割るかは，お任せするけども，

金城：あと，今，思いついたことなんですけれども，芸術祭みたいな，お祭り系で，

有田：ああ，阿波踊りじゃなくて，ヨサコイとか

金城：それだけじゃなくて，小さな団地の中でだつて行われているし。そういうような流
れ，上野の森の音楽祭もそうなんですけれども，全国的にいろいろなものが行われてい
ますよね。

折橋：形態が変わってきてるのよね。だから社会構造が変わってきているから，昔は，中
央でやってたものが各地方で行われているのでしょうかね。

有田：ないしは、福島復興みたいなところで地域復興みたいな。

金城：そうそう、東北地方復興で伝統芸能がたくさん使われていますね。

有田：一生懸命お祭りやって。

金城：そういう伝統芸能中心に人を集めようとか.. だから、伝統芸能なんだけれども..

折橋：だから違うものが出てきているんだよね。

有田：どちらかというとな参加型？盆踊りじゃないけど、ヨサコイ祭じゃないけど、あれ見に行く人もそうだけど、やろうとしている人達も衣装から何から何まで自分たちでしているようですね。

折橋：松田さんの頭にあったときには、まだ定型というのですか？、形があったけど、今は無定型になっているんですよ。それがいつ頃から変わってきているのかが知りたいですね。

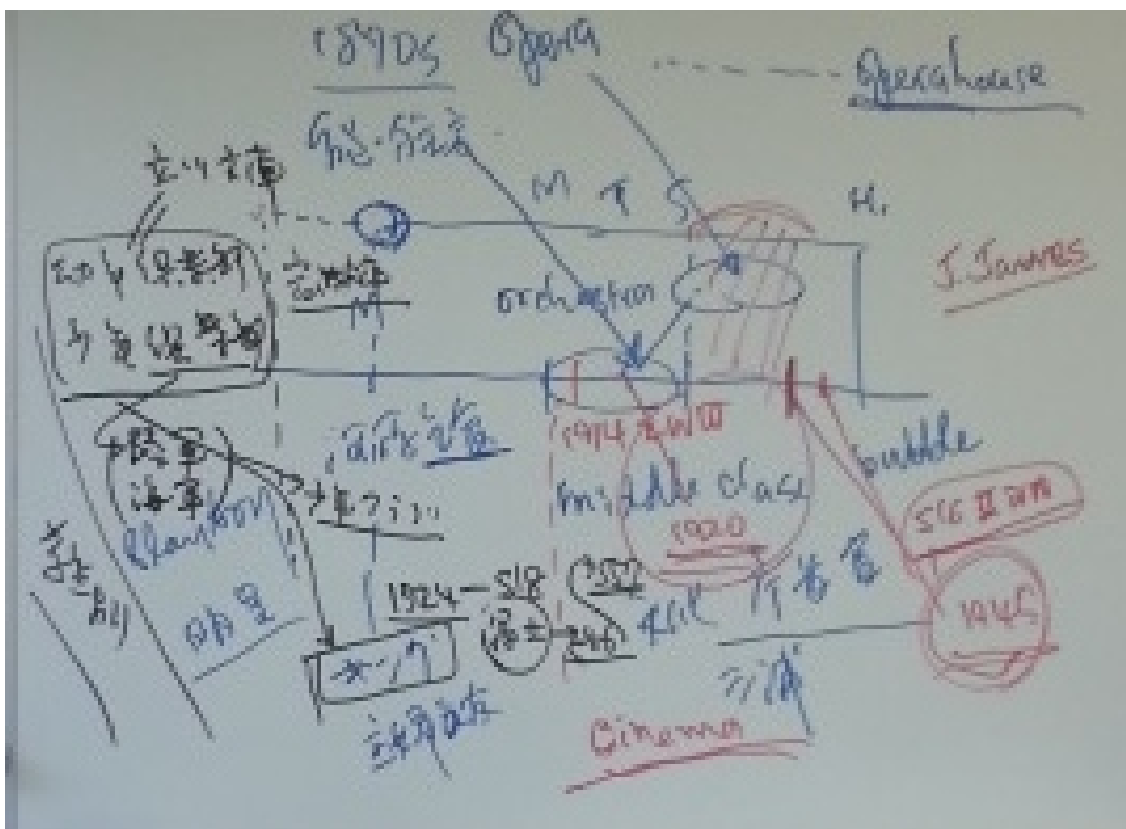


図 12 板書

有田：なんか途中から、いろんなもんがズロズロって年表に入ってくるのって、面白いと思うんです。昔はなかったものがこれだけ多様化しましたよって。

金城：年表の中に、もしかしたら小さな括弧書きでコメントが入っても面白いかもしれないですね。括弧して、そのよう定型から無定型に動いているんじゃないか、みたいな。そういうコメント付の年表というのも非常に面白いんじゃないでしょうか。

松田：あともう一つね，文化メディアで，さっき話さなかったんだけど，いったいシネマの話は，しましたけれどね，皆さんの中では，『キング』という雑誌があったことは知っていますか．聞いたことがありますか．

折橋：うん．

松田：折橋さんは知っているけどさ．若い人達は，聞いたことがないでしょう？

有田：わかんないなあ．あったっけ？

松田：『主婦の友』っていうのがありましたけれど，それと『明星』という雑誌が．

有田：『明星』は廃刊だって聞きました．

松田：うん，いつからいつまで出ていたのかとか，『プレーボーイ』ってのはいつからいつまで出ていたのかとか，日本の中層層は，昭和期の初期で東京でオーケストラの定期演奏会を支えることが出来るように見えたがそれは公共放送があったからです．所得の不平等度がジニ係数で 0.35 程度になりましたから，一応中産階層が成立したといえるでしょう．もう少し元気があれば，文化庁が補助金を出している芸術活動の諸団体のプロジェクトの収支決算書を分析してみたいと思いますが誰か若い人がやってくれませんか？

6. 2015 年度第5回文化統計研究会(幹事会)記録

開催日時：2015年9月8日(日) 13:30-17:00

配布資料：永山貞則「芸術家の生活を支えているのは誰か(仮称)——芸術家世帯の内部構造——」(以下でこの資料を提示)

【概要】 芸術家の生活を支えているのは誰か(永山中間報告)

【配布資料】

芸術家の生活を支えているのは誰か(仮称) ——芸術家世帯の内部構造—— 〔永山〕

1 はじめに

芸術家については、国勢調査が包括的な情報を与えてくれる。しかし、国勢調査は個人単位または世帯単位で集計されているため、世帯の内部構造、つまり世帯員相互の関係まではわからない。そこで、国勢調査のマイクロデータを使って芸術家の世帯の内部構造を探ってみる。

ここでは、分析の視点は二つある。

第1の視点は、夫婦間、あるいは親子間の職業の相互の関係がどうなっているかである。例えば夫が音楽家の場合、妻も同じ音楽家の割合はどの位か、他の職業の場合はどういう職業との組合せが多いのか、その分布を明らかにしたい。

一方、親子関係の場合は、世帯内に同居している場合にかぎられるので、子供が独立して別の世帯になっている場合はその関係は分からないという制約がある。親子関係の場合は、むしろ次の視点の方が重要である。

第2の視点は芸術家の生活を支えているのは誰か、という点である。芸術家の収入は国勢調査では調査されていないが、他の諸調査(注)によると収入分布はかなり低い方に偏っており、特に女子の場合に偏りが大きい。収入の低い方は独立して生活を維持するのは難しく、家族と一緒に生活しているケースが多いと考えられる。そこで、妻が音楽家の場合に夫はどのような職業が多いのか、また子供(世帯員)が音楽家の場合、その父親(母親)はどのような職業が多いのか、それぞれの分布を探ってみたい。日本の舞台芸術は多くの低収入の人たちに支えられている面があるので、その親たちはいわば芸術のパトロンと考えられよう。

分析に当たっては、2人以上世帯(複数世帯)の内部構造は複雑で、世帯主、配偶者、世帯員のいろいろな組合せがあり、また収入が低くても1人で生活している(単独世帯)ケースも多い。そこで芸術家(芸術関連職業の就業者)のすべてを単独世帯と複数世帯に分けて、いろいろな組合せの分布をとり全体像を示す。そしてその中から主要な組合せを取り出して、上記の二つの視点からの分析を行うこととする。

2 芸術家の世帯構造

ここでは芸術家が単独世帯と複数世帯にどのように分布しているかを概観する。
とくに次の観点から分布をみる。

- (1) 複数世帯では、世帯主、配偶者、世帯員に、どのように分布しているか
- (2) 単独世帯の未婚者と、複数世帯内の世帯員と年齢分布を比較して、結婚前の芸術家が家族と同居している場合と、単独で生活している場合の割合をみる；

【集計案】芸術関連職業就業者を単独世帯と複数世帯に分けて集計する。

【単独世帯】

表1 男女、年齢、配偶関係別、芸術関連職業就業者数

[表側] 配偶関係別、芸術関連職業小分類

[表頭] 男女別、年齢5歳階級別

*配偶関係別に集計するのは、複数世帯内の世帯員と比較する場合
未婚のみを取り出すためである。

有配偶は少ないと思うが、死別、離別が多い場合は、別途分析を考える。

【複数世帯】

表2 世帯主・配偶者・世帯員別、男女、年齢別、芸術関連職業就業者数

[表側] 世帯主・配偶者・世帯員別、芸術関連職業小分類

[表頭] 男女別、年齢5歳階級別

3 世帯内のクロス

夫婦間、親子間等のいくつか典型的な組合せを選び、職業のクロス表を作る。

例えば、夫が音楽家の場合、妻が同一職業（音楽家）か、他の芸術関連職業か、その他の職業か、無業かを集計する。特に世帯員の芸術家の場合、その親の職業は、芸術家への財政的支援の状況を推測できる。

世帯内のクロスをすべて考えると膨大な組合せになるので、まず典型的なクロスから始める。また「他の芸術関連職業」と「その他の職業」の分類も出現度数を見てから細分する。

【夫婦世帯の場合】 *他の世帯員がいる場合を含む

表3 夫が芸術家の場合の妻の職業

[表側] 夫（世帯主）の芸術関連職業小分類

[表頭] 妻（配偶者）の職業（*）

*無業・有業別 有業の場合

同一職業か、芸術関連（小分類）、他の職業

表4 妻が芸術家の場合の夫の職業

[表側] 妻（配偶者）の芸術関連職業小分類

[表頭] 夫（世帯主）の職業（*）

*無業・有業別 有業の場合
同一職業か、芸術関連（小分類）、他の職業（大分類）

【子(世帯員)と両親との関係】

表5 子（世帯員）が芸術家の場合の父親（母親）の職業

[表側] 子（世帯員）の男女別、芸術関連職業小分類

[表頭] (1) 父（世帯主）の職業（*）

*無業・有業別 有業の場合

同一職業か、芸術関連（小分類）、他の職業（大分類）

(2) 母（世帯主または配偶者）の職業（*）

*無業・有業別 有業の場合

同一職業か、芸術関連（小分類）、他の職業（大分類）

【父子世帯の場合の子】

表6-1 子（世帯員）が芸術家の場合の父親）の職業

[表側] 子（世帯員）の男女別、芸術関連職業小分類

[表頭] 父（世帯主）の職業（*）

*無業・有業別 有業の場合

同一職業か、芸術関連（小分類）、他の職業（大分類）

【母子世帯の場合の子】

表6-2 子（世帯員）が芸術家の場合の母親）の職業

[表側] 子（世帯員）の男女別、芸術関連職業小分類

[表頭] 母（世帯主）の職業（*）

*無業・有業別 有業の場合

同一職業か、芸術関連（小分類）、他の職業（大分類）

*父子世帯が少ないが場合は簡略

4 年齢とのクロス

表が膨大になるので、とりあえず、音楽家について分析する。

第3表から第6表まで、表側の音楽家について年齢階級別にする。

*音楽家は個人教授を除くと、個人教授とわかる。

5 今後の分析

上記の分析を基に、焦点を絞ってさらなる集計分析を行う。結果があいまいな場合は表題は再検討する。

7. 2015 年度第6回文化統計研究会記録

開催日時：2015 年 9 月 13 日（日）13:30-16:30

開催場所：国際文化会館西館セミナールーム 403

配布資料：松田芳郎「芸術家の母集団分布に関して：国勢調査データと我々の編成したデータベースについて」（以下でこの資料を提示）

【概要】 講義「芸術家の母集団分布に関して：国勢調査データと我々の編成したデータベースについて」（松田）

【配布資料】

芸術家の母集団分布に関して：国勢調査データと我々の編成したデータベースについて

松田芳郎

1. 国勢調査の再集計の目的：

これまで我々は三善晃を研究代表とする科学研究費による研究に端を発して、日本の職業的な芸術活動家のキャリア形成調査と生計調査の両面を調査する「舞台芸術家調査」をほぼ5年周期で実施してきた。第2回以降はこれらの演奏芸術家に加えて美術家をもその範疇に加えている。ただ、そこでの演奏芸術家は、いわゆるポピュラー音楽やアマチュアの演奏家をはずして、通常クラシックと分類される演奏家で、ほぼ職業的に演奏芸術家として自他ともに認められている人を対象としている。これは当時の文化庁芸術課長の見解として、文化庁の助成対象の舞台・演奏芸術分野を対象としているというのが、暗黙の了解事項であった。すなわち文化庁の中で、いわゆる有識者を集めて組織された親委員会の検討対象分野に合わせたものである。そのために、演奏年鑑、舞踊年鑑、演劇年鑑等に登録されている人を調査対象の母集団としている。われわれは MAD (Musicians, Actors and Dancers として) データベースとして編集している。しかし世に芸術家と自認している人の裾野はもっと広くポピュラーや準職業演奏家等を含むものと言った方が正確であろう。それらは全国の居住者の悉皆調査である国勢調査に依拠しなければならない。

したがってわれわれは、2種類のデータベース、すなわち MAD データベースと国勢調査に依拠した世帯員情報により編成されたデータベースとがある。後者は、産業職業の詳細記入をされた情報に格付けされたもので、俗に20%抽出データと呼ばれてきたが、近年は抽出率が縮小され15%前後になっている。

本稿は、2005年の国勢調査から、この産業・職業詳細格付けデータから、少なくとも一人は芸術家であると申告している職業の世帯員の居る世帯を抽出して、その世帯構造を分析した結果である。対象世帯の抽出は、統計局から統計センターに依頼して、産業・職業詳細格付けデータから、抽出されたファイルを統計法の33条に基づいて筆者らの共同研究グループに提供されたものである。但し、個票情報の操作は、許可を得た周防節雄兵庫県

立大学教授（現、同大学名誉教授）が分担した。

ここで注意すべきは、我々の芸術家調査と異なって、国勢調査での職業が芸術家であると申告している人は、かならずしもそれで生計を立てていることを意味しないし、それで報酬を受け取っているという保証もないのである。その点は、他の職業と同一である。公序良俗に反しない職業であるならば、それを職業として申告することは可能である。

今一つは、国勢調査は3か月以上の居住歴のある者を対象としていて、その国籍・民族を問わないことである。ただ在留資格を持った芸術家の比重は必ずしも高くないので、ほぼ海外で活動している日本人を除き、国内居住の日本人は網羅している可能性が高いが、外国人にはそれほど高くない可能性がある。

ただ、集計結果は暫定的であり、引用の際には事前に我々の共同研究グループの許可を必要とする点に留意されたい。

2.集計の範囲

周知のように国勢調査は、上記のように、国籍・民族の如何を問わず3か月以上日本に滞在している者がその居住地で自計式により記入するものであり、日本以外の国籍・民族に属するもので日本語を解さない者に対しても、十数か国の言語の記入要領と調査票が配布されている。

ただどの調査と同様に、統計法による申告義務違反に対して罰則があっても少数の未申告・調査拒否の発生している事実は否めない。特に永住許可を得ない者等で、営業許可を得ずに流しの演奏家として就労していて、その結果調査拒否をする者が発生している可能性はある。ここではその点には触れないことにする。

3.集計基準

集計は、第1に、単身世帯と複数世帯に分けて集計している。

当然、ここで単身世帯は、芸術家の再分類格付けの芸術家を抽出しているので、これらの世帯はすべて芸術家と申告した者になる。但しここでの単身者は、単身で生活しているのであって、かならずしも「独身」とは限らない。既婚で有配偶で別居している者、死別・離別して単身世帯になったものも含まれる。前者は国勢調査の世帯の定義が、住居・生計を一にするものという定義であるので別居している者は同一世帯とみなされるとは限らないからである。特に老人世帯で離れに住んでいる者で、年金等の別生計費で暮らすものは、単身世帯として申告していることが多い。

複数世帯員の世帯は、芸術家の数でわかれてくる。分析の簡便さを基準に、夫婦二人世帯を別掲している。

以下集計結果について略述する。

4.単身世帯の状況

芸術家一人のいわゆる単身世帯は、37,514世帯であり、したがって芸術家の数も同じである。これは、全芸術家世帯の20.17%である。此の男女別、5歳刻み年齢階層別分布は第1表「**芸術家が一人だけいる世帯の分布:2005年**」に示すようであり、20—29歳がもっとも人数が多い。この表から明らかなのは女子の方が現役の比率が高いことである。

その背後にあるのは、第2表の職業別細分類が示すように小中高校の教師で芸術関係の教職についている者の比重が高いことが一因であると推定される。これらの人々は、50—60歳で定年を迎えて、現役を引退していると推定される。これに対して大学教員は70—75歳まで勤務して現役の教職を去っていると推定される。

美術家は舞台芸術家よりも長く現役で活動している。反面、演劇は長く舞台上で活動しているが、必ずしも教員として安定的な収入を得て生活を支えているとはいえない。舞踊家の舞台上の生命はより短いと言える。

さらに有配偶・無配偶の者の統計表は、第4表に示すように、未婚が過半であり、有配偶者で単身の比率も無視できないのは、別居を余儀なくされている比率が高いと推定される。ほぼ同数の者が死別・離別で単身であることも個人別の特徴である。詳細は、第5表で示すように、年齢階級別の分布をみると離別は若年層からも排出しているが、死別は高齢になるにしたがって増えてきている。

8. 2015 年度第 10 回文化統計研究会記録

開催日時：2016 年 2 月 21 日（日）13：30-17：00

開催場所：国際文化会館 403 研修室

出席者：有田，稲垣，金城，永山，松田，山口（五十音順敬称略）

配布資料：「4 需要側（聴衆）の意識：自由記入欄の分析」統計数理研究所の共同研究報告書『舞台芸術の需要と供給から見た芸術活動の将来性』（H27 一般研究 2 研究番号 2034，代表有田富美子² 松田芳郎³ 山口幸三⁴ 金城ふみ子⁵ 土屋隆裕⁶）に基づいて，以下の通り報告が行われた。

【概要】 今後の活動に関する討議と報告「舞台芸術の需要と供給から見た芸術活動の将来性」

【議事次第】

1. 前回会議で保留になっていた今後の活動に関する討議（1:30-3:00）

（特に「最終報告書」5回の調査の累年版の総括したものの出版にあたって，執筆の意向の確認の方法に関して）

2. 報告：舞台芸術の需要と供給から見た芸術活動の将来性（3:00-5:00）

挨拶：有田

- 1) 芸術家の動向 — 芸術家の育成と鑑賞者の私的回想（松田）
- 2) 公的データによる需要・供給の分析（有田）
- 3) 学生調査の時系列比較（山口）
- 4) 需要側（聴衆）の意識：自由記入欄の分析（金城）
- 5) 舞台芸術家の将来（有田）

【配布資料】

4. 需要側(聴衆)の意識:自由記入欄の分析

4.1 はじめに

文化統計研究会が 1986 年から 5 年間隔で 5 回実施した「現代青年の芸術意識と芸術活動に関する調査」のうち，科学研究費を得て行われた第 1 回調査では，ほぼ同じ調査票を用いて，「その 1（学生調査）」と，それと対比するために行われた「その 2（勤労青年調査）」

² 東洋英和女学院大学 国際社会学部 教授

³ 計情報研究開発センター 客員上席研究員

⁴ 統計情報研究開発センター 研究員

⁵ 東京国際大学 経済学部 教授

⁶ 統計数理研究所 准教授

の二つの調査が実施された⁷。以下、本章では、前者を「学生調査」、後者を「社会人調査」と呼ぶ。また、勤労青年を社会人と呼ぶ。なお、この社会人調査は、調査実施事業所の確保が難しいなどの理由で、初回しか行われなかった。

「学生調査」の結果については、若者の芸術意識や芸術活動に関する時系列研究として各回の調査報告が行われてきており、また、本報告書の第3章でも累年統計分析が行われている。そこで本章では、まだ分析が行われていない、第1回調査のみで設けられた、「音楽や演劇など芸術活動を盛んにするために国や都道府県・市町村は何をすればよいと思えますか。」という設問で、芸術文化行政に対する意見を求めた「自由記入」欄の回答の一部を取り上げ、「社会人調査」と、全部で5回行われた「学生調査」の第1回目の回答を比較して報告する。

4.2 調査対象

分析には、初回調査しか行われなかった「社会人調査」では個票から直接読取ったが、「学生調査」では個票原票ではなく、それをスキャンしたものを使用したため、今回の分析対象とした自由記入欄だけでなく、その他の記述を求める回答部分にも判読不能な箇所が散見される⁸。社会人の調査票総数1597で自由記入のあったもの184の約1割がまったく判読不能であり、それを除外した分析対象数は166である。ただしこれは、できるだけ多数の意見を汲み上げようと、「一部判読不能」のものも採用した数である。今回のパイロット分析では、社会人と学生の双方の自由記入合計300を最終分析対象とした(表4-1)。

調査対象の大学の選定と分析作業は個票原票を用いて行った。原票は、青森公立大学附属図書館松田文庫の「現代青年の芸術意識と芸術活動に関する調査」(1986年度実施分)として5箱の段ボールに分けて収蔵されている。今回の分析に使用する個票は、その第3箱に収められている「社会人調査」のすべての個票と、7校分(琉球大学・香川大学・岡山大学・京都産業大学・富山大学・山形大学・芝浦工業大学)の個票を使用した。社会人調査の個票をすべて分析対象としたのは、その絶対数が少ないためである。学生調査の個票については、言うまでもなく、恣意的な選択であり調査対象全体を代表するものではないが、調査実施団体の所在地も一応南北に亘り、大学だけでなく専門大学を2校も含んでおり、パイロット分析の対象として問題ないと考えられる。また富山県では、A社と富山大学の今回分析可能個票数がそれぞれ25、24とほぼ同数であり、同地域での社会人と学生との差異

⁷ 「わが国の芸術活動の動向予測に関する基礎研究」(研究課題番号:62124014)昭和62年度科学研究費補助金(特定研究(1))研究成果報告書(研究代表者:三善 晃)。勤労青年調査は、「調査実施事業所数は合計19事業所で、合計配布部数2,354部、最終回収数1597部」(p.499)である。1事業所のサンプルでは自由記入欄への記入がなかったため、本章での分析対象とはならなかったため、表4.1の事業所数は18となっている。学生調査では学校名が一覧掲載されているが(p.412)、社会人調査では、事業所名は伏せられた集計票で掲載されている(pp.500-501)。

⁸ これは、回答がHなどの肉眼でも読み取りにくい鉛筆などで書かれたためもあるが、スキャンの仕方にも問題があったと考えられる。

のたまかな比較も可能である。

表 4-1 分析対象の自由記入のあった個票数

調査の実施場所	学校	事業所	合計
協力組織数 ⁹	6	18	24
自由記入がされた票数/回収総数	134/591	184/1597	318/2188
判読不能を除外した分析の対象数 /回収総数 (%)	134/591 (22.7%)	166/15 (10.4%)	300/2188 (13.7%)
自由記入内容項目数 (複数回答)	336	257	593

注：調査対象者は 18-29 歳であったが，社会人の回答年齢 30 歳 1 名含む。
事業所数については，本文の注 15 参照。

4.3 調査結果

自由記入欄の分析方法は，手作業のパイロット調査分析として，自由記入のある個票だけを選び出し，記載内容をたまかに分類した。ただし，一つの自由記入で複数のことについて書かれている場合は，表 4-1 で (複数回答) と示したように，要素に分けてそれぞれ該当する項目として数えて，合計約 600 の意見を得た (表 4-1，表 4-2)。

表 4-2 自由記入の内容 (複数回答)

分類項目	大学生	社会人	合計
芸術文化行政に対する現状認識	16	2	18
宣伝	32	13	45
施設の増設や整備	60	62	122
上演上映公演回数主催者	21	23	44
演奏展示内容	27	23	50
援助	10	31	41
料金の値下げや格安での提供，チケット購入への補助金，税金の廃止	83	37	120
活動	29	40	69
その他の意見	58	26	84
合計	336	257	593

表 4-2 の大学生と社会人の合計で，もっとも多いのは，施設の増設や設備と，芸術鑑賞や芸術活動に関するお金のことである。この両者は合計数ではほぼ同数であるが，チケッ

⁹ 同じ組織でも多数の協力者を得て実施した。その数はここでは割愛する。

ト料金などお金のことについては、大学生が社会人のほぼ2倍の要望者がいる。税金についての言及もかなり見られる。

劇場やホールなど施設については、「音楽専用設計されたホールが少なくとも一都道府県に一つは必要だ」という意見がある。増設だけでなく、「一般庶民が利用できアマチュアの作品を一般に公開するような施設、芸術が身近に感じられるようにすべきだ」という意見もある。また、建物だけでなく、「街角コンサート等、大衆の身近での芸術活動ができる場所の提供等が必要だ」という意見もある。

「その他の意見」を除いて、次に合計数が多いのは「活動」である(表4-2)。活動そのものを活性化するためには、「市民の芸術活動が始めやすいようにすべき」であり、例えば、練習や発表のための活動場所の提供や時間帯の設定の見直し、借りるための手続きの簡便化や制約の解消などに加え、公的な芸術サークルの開設などへの要望や提案がある。さらに、自分が所属している吹奏楽団では「音楽をやろうと思ったきっかけは、小さな頃に聞いた生演奏に感激して…」という団員が多いことから、教育委員会などからの働きかけで地元の高校・大学の吹奏楽団やプロのオーケストラによる少・中学校への訪問演奏の機会をもっとつくり、「小さい頃から、生の演奏に触れるチャンスを与えることが重要だ」という音楽鑑賞にも繋がる意見もある。

また、「演奏展示内容」についての要望も多い。「海外から有名アーティストを呼ぶ」という、芸術輸入論あるいは日本国内での芸術自給率の低さ、ないし国産芸術に対する需要の低さを露呈した意見もある。「宣伝」と「上演」などについてはほぼ同数である。宣伝については、どのようなものを上演しているのかをもっと紹介すべきだという意見が学生に多い。上演については、回数の増加を求めるものや、時間についての要望が目立つ。

学生の「現状認識」としては、芸術鑑賞の環境が地元の芸術施設が都会と比べて貧相だとか、地方ではコンサート等の回数が少ない、などという認識や都会に対しての格差感が顕著である。チケット料金だけでなく、「自由に活動する場が足りない」という記載も多い。また、「外国からのアーティストを恥ずかしくてよべない」とか、「立派な施設の整備」および増設を希望しているが、「恥ずかしい」と思う具体的な点や、「立派な」の中身についての記載がない。

社会人から出ている意見や要望は、学生から出たものより種類が多く、概して具体的であり、積極的な提案も散見される。(表4-3、表4-4)たとえば、社会人にも行きやすい芸術鑑賞時間帯や、チケットの入手方法の簡便化など働いている人への配慮を求めるものもある。また、設備の充実要請について求める意見でも、「音響効果が整い、多くの人が入れるようなホールの設置」、など具体的な記述がされている。ただし、「厚生施設の充実」や「美術館、ホール等をより充実させるべきだ」のように、「充実」の意味内容が不明なものもある点は、学生と同じである。

表4-3 富山大学（自由記入24人）有効個票数21人，意見文34

1	思うところはたくさんあるのですが，今，つかれているので書けません。
2	酔を飲んで頭をやわらかくすればよい。
3	芸術活動の紹介を積極的に行なう。
4	行政側からの運動はかえって逆効果になる可能性があると思います。
5	活動の拠点【建物？仕組み？】を作る。（ホールなど）
5	交流を盛んにする。【誰と誰の？】
5	外来の芸術家を招く。
6	何よりもまず，都道府県市町村の職員が，好んで芸術家に接しているのかが問われる。
7	毎月，“演劇の日”なるものをもうけて催しをするとか，
7	アマチュア活躍の場を与える。
7	地方のホールの設備をもっとよいものにする
8	会場を立派なものを思い切って建てる
1	ちゃんとした設備のホール等を
1	安く気軽に提供【誰に？】できるようにする。
2	テレビ局の多極化，有線テレビの設営，民族FM局の全国ネット化
2	劇場の抽選招待制
2	展覧会会場の各地移動
3	もっともっとたくさんのコンサートや催物をすればよいと思う。
4	私は「日本音楽集団」大好きです。
5	宣伝活動をもっとさかんにする。
6	演奏会などをもっと増やす。
7	会場の設備（特に音響効果）をよくすればよい
8	宣伝活動の活発化
9	劇場やホールなどの芸術的（？）施設を地方の小さな町にも出来るだけ造ってほしい。
9	都会には次々とあまるほど出来るのだから，その分を地方に回してもよいのではないか。
9	やはり生のものにふれなければ感性は育たないのではないかと思うからです。
9	それぞれの芸術のおもしろさ，だご味を知らせる努力が必要です。 でも，これは個人で発見すべきものであるはずであるし，その辺がジレンマである。
10	設備を整える
11	小さな町や村にも，ホールを作り，
12	いつでも何か必ず催し物を行えばいい
12	もっと広報活動を積極化する
13	地域ごと，町ぐるみの参加活動をおこなわせる。

14	設備の整ったホールを建てればよいと思う。
15	幼少期から芸術活動に関心をもつような教育を施す。
15	施設を充実させる。
15	芸術活動に接する機会を増やす。
16	もっと音響設備のととのった会場をつくってほしい。(公会堂をたてなおす etc)

注：表側の番号は回答者を示している。同じ番号が複数あるのは、一人の回答の中に複数のことが書かれている場合に、本文では分割して数えたことを示している。また、二重線の区切りは調査を実施した場所【クラス】の違いを示している。

表 4-4 A 社（自由記入 25 人）有効個票数 20 人，意見文 35

1	設備をもっとふやしてほしい。
2	宣伝に力を入れ、芸術活動を行うホールをもっと増やせばいい。
3	音響効果が整い、多くの人が入れるようなホールの設置
4	広い駐車場完備の公共施設があればいい。
5	劇場などをもっとたくさん作ってほしい。
5	駐車場があればいいと思います。
5	地方まわりのため料金が高すぎる。
6	私の住んでいる町に映画館を作って欲しい。
6	緑のある素敵な公園を作ってほしい。
6	スポーツセンターをつくって、スポーツをさかんに出来る様にしてほしい。
7	地方へが、毎年定期的に活動し、定着性を深める。
7	地方でのアマチュア劇団、バンド等に発表の場を拡げ、PR を大々的にアピールする。
8	映画館を増やして、マイナーな映画や、昔の名画など、今まで富山で見られなかった映画を上映してほしい。
8	ライブハウスが欲しい。
8	美術館博物館も欲しい。
9	リバイバル専門の映画館、ライブハウスをつくってもらいたい。
9	車を持っていない人のために、ホールまでの交通のつごうをつけてもらいたい。
9	美術館でもっと海外のものをやってほしい。
10	有名人を大沢野文化会館に沢山よんでほしい。 有名人ばかりでなくても、演劇とかミュージカルとか落伍とかやっぱり沢山してほしい。
11	地域のサークル活動などをもっと活発化し参加しやすくしてほしい。
11	仕事のあと活動の場へ参加できるように、労働時間を短縮してほしい etc.
12	芸能・芸術活動の会場を増やす。

13	もっとたくさんのアーティストを呼んでほしい。
1	税金を使って上記の入場券を安くする。
3	芸術家を目指す若い人たちが・・・援助を行う。例えば、古い住宅を・・・
4	若年層からの積極的な教育（伝統演芸に限る）が必要である。
5	地方は都市にくらべて、どうしてもコンサート等の回数が少なくなりがちであるから、市や県が積極的に呼ぶべきではないか。
6	大きなイベントのできるような設備（ホール、ステージ）を設ける。
7	大沢野町にも貸レコード屋があればいい。
7	大沢野町には芸術活動を盛んにするようなものが富んでない。
1	誰でもが自由に安く参加できる活動を斡旋した方がいいと思う。
2	開催の PR. いがいと活動をしらない。地方雑誌を多く活用する。
5	自由な宣伝活動をできるようにすればよい。ポスターなど。
6	文化的な...の数を増やしたり、・・・
7	アマチュアの作品を一般に公開するような施設、雑誌をふやす。
8	もっとたくさん公演をふやす。

注：番号は回答者を示している。同じ番号が複数あるのは、一人の回答の中に複数のことが書かれている場合に、本文では分割して数えたことを示している。「...」はスキャンファイルで判読できなかった部分であることを示している。また、二重線の区切りは調査を実施した場所【部署】の違いを示している。

4.4 大学生と社会人の回答傾向の違い

大学生と社会人との差がもっとも大きいものは、「芸術文化行政に対する現状認識」である。「現状認識」とは、地域格差が大きいとか、他の先進国と比べて日本は芸術支援に使われている予算が少ないなどの芸術文化行政全般に対する認識である。

同じ地域に生活している大学生と社会人では、回答にどのような異同があるのか。富山地方を例に見てみると、富山大学（個票数 24）と A 企業（同 25）は、要素に分けた場合、それぞれ 38 と 37 で数としてはほとんど同じであるが、その中身にはかなりの差異がみられる（表 4-3, 表 4-4）。「今、疲れているから書けない」とか、「酔を飲んで頭を柔らかくすればよい」のような冗談を書いたり、「日本音楽集団¹⁰が好きです」など、質問が求めていることから外れた記述が学生には見られる。

両者に共通する点は、芸術鑑賞や芸術活動を行うための施設や場を求めていること、宣伝や広報、芸術に関する教育の必要性の指摘である。学生の回答には「行政側からの運動

¹⁰ 1964 年誕生した、「それまでの伝統的な邦楽の一線を越え、現代のスピード感、力強さをバネにし、誰にでも親しめる新しい邦楽のあり方を求めた一群。」（「日本音楽集団」ホームページの「プロフィール」<http://www.promusica.or.jp/about/profile.html>）

はかえって逆効果になる可能性」や、「芸術のおもしろさ、だご味を知らせる努力が必要」ではあるが、「これは個人で発見すべきもの」というジレンマを書いているなど、学生らしい理屈っぽさが見られる。一方、社会人は、必要な芸術施設を音楽に限らず、「映画館、ライブハウス、美術館」と幅広く、具体的にあげている。また、「地域のサークル活動などをもっと活発化し参加しやすくすること」、だけでなく、「仕事のあと活動の場へ参加できるようにすること」、そして、そのための手段として「労働時間の短縮」を求めるなど、指摘の視野が広い傾向がみられる。

同じ地域に住んでいても学生と社会人では、文化芸術行政に対する要望が異なっていることが推測される。

4.5 結びに

以上、社会人と大学生では、芸術文化行政についてどのような意見や要望の差があるのかを「自由記入」欄に書かれていたことから検討した。

この調査が行われたのは1985-1986年である。30年も昔の若者の意見などを分析して、今頃何の役に立つのかと考える向きもあるかもしれない。確かに「箱物行政」の時代は終わったように見えるが、「芸術の国内自給率」については、どのように考えられているのだろうか。いっどこでどのような芸術講演や活動が行われているかについての宣伝が足りないという意見は、20代での「スマホ」の普及率が80%を超えたといわれる¹¹今日では減少したのだろうか。

この調査結果は、考え方を逆転すれば、30年前に若者たちが願った芸術文化行政への要望がどの程度実現したのか、あるいはしなかったのかを図る手がかりとすることもできる。そして、それを計るために今は高齢者となったかつての若者が今、文化行政や日本の文化芸術の状況についてどう考えているのか、また、その人たちの子供に相当する若者世代にはどのような新たな需要が発生しているのかを把握するためにも、今一度、同じ調査が行うことが、よりよい芸術文化行政の推進のために必要かつ有用なのではないか。

以上今回は、自由記入欄を分析する意味があるのか、どのような傾向がみられるのかを検討するために、ほんの一握りのサンプルに限って分析した。このような結果を得て、調査の範囲を拡大することで、また異なる興味深いアイデアが得られる可能性が見えた。

最後に蛇足ではあるが、文意が正確に伝わらない記述が少なからず見られ、若者の日本語力の低下が気になったことを付け加える。

¹¹ 市川 正樹大和総研調査本部主席研究員「スマホの正確な普及率は」（大和総研が内閣府「消費動向調査」、総務省「国勢調査」、中央調査社「パーソナル先端商品の利用状況」（2014年12月）から作成した「スマホや携帯の普及率」（2014年3月消費動向調査、単身世帯）グラフ。
http://www.dir.co.jp/library/column/20140522_008534.html

